

研究者総覧 2025



新潟国際情報大学
Niigata University of International and Information Studies

研究者総覧 2025



新潟国際情報大学「研究者総覧」(2025) について

大学教員の仕事は3つあります。研究、教育、行政です。まず自らの関心にもとづき研究をおこないます。次にその研究成果をもとに学生たちを教育します。そして教授会や委員会などの場で大学行政の運営に参加します。

本学は1994年（平成6年）「環日本海拠点都市新潟の地に国際化、情報化が進む現代社会に貢献する人材の育成に努めること」という理念の下に設立されました。その年に最初の学生が入学し、3年後に4年生までそろい、いわゆる完成年度を迎えました。

その完成年度以降、現在に至るまで本学では「国際学部」「経営情報学部」ともに新任の専任教員をすべて公募制で採用してきました。公募制とは、新規に採用したい教員の研究分野、担当科目、職位などを大学側が明らかにして広く世界に募り、その応募者全員を公平に審査して専任教員を選任することです。その仕組みを簡単にいえば「コネ採用」をおこなっていないということです。

設立以来、本学はおかげ様で30有余年にわたって順調に発展を続けてきました。この間に送り出した多くの卒業生たちは地元新潟を中心に活躍しており、建学の目的に沿って着実に歴史を積み重ねて来たと自負しています。そうした本学の発展は本学の教員採用の方法とも関連しているのではないかと私は考えています。公募制により優秀な研究者を継続して採用できてきたからと思われるためです。その意味で本学の教員はまず何よりも研究者です。各自の研究分野が確固としてあるからこそ、それをもとに講義内容として新しいもの、重要なものを学生に提供することができます。また研究と教育の経験から教員たちは大学のあるべき姿を理解し、大学行政に生かしてきました。

この「研究者総覧」は本学教員の研究内容を紹介しています。知的財産としての彼／彼女らの知識、研究成果を、本学の学生はもとより、本学を目指す高校生の皆さん、企業、行政機関、他大学など各種教育機関に属する方、地域住民の皆さんなど、多くの方々に広く知っていただければ幸いです。

大学教員の3つの仕事に4つめを加えるとすれば、みずからの研究成果を社会に還元するということです。いろいろな機会にこの研究資源を皆様に活用いただくことも期待しております。本総覧がこうした所期の目的と役割を十分に果たすことを願っております。

2025年4月

新潟国際情報大学 学長 越 智 敏 夫

凡 例

[illegible]

収録内容

2025 年 4 月 1 日現在で本学に在職する専任の教員（教授、准教授、講師）を収録した。

順載掲

学長並びに本学を構成する教員を学科ごとに掲載し、その所属ごとに教授、准教授、講師の順とした。

掲載事項

氏名	フリガナ	ローマ字を付記
職名	現在の職名及び()書きで就任年月を記載。	
連絡方法	Eメール(電子メール)アドレスを記載。	
学歴	大学等及び大学院を記載。なお、大学院博士課程の単位取得満期退学も記載。	
学位	学位名、授与大学名、取得年月を記載。	
職歴	職名、在職期間を併記。(間近の経歴を含む。)	
受賞歴	主要な学術に関する受賞状況について、賞の名称、受賞年月を記載。	
研究分野	現在の研究テーマについて記載。	
主要業績	過去に発行した著書・学術論文のうちから主なものを新しいものの順に記載。著書については著者名、発表年、書籍名、出版社名を、論文については著者名、発行年、論題、雑誌名、巻数(号数)、開始頁、終了頁を記載。	
所属学会	主なものを記載。	
その他	所属する委員会や研究会、地域連携、競争的資金獲得状況等、特記すべき事項を記載。	

目 次

学長	6
国際学部 国際文化学科	9
井堂 有子	11
臼井 陽一郎	12
區 建英	13
佐々木 寛	14
澤口 晋一	15
申 銀珠	16
矢口 裕子	17
山田 裕史	18
吉澤 文寿	19
熊谷 卓	20
小林 伊織	21
鈴木 俊弘	22
鈴木 佑也	23
瀬戸 裕之	24
中村 貴	25
藤本 直生	26
リューデ アンナ	27
佐藤 泰子	28
ジュリアス マルティネス	29
シンシア スミス	30
経営情報学部 経営学科	33
内田 亨	35
木村 誠	36
佐々木 宏之	37
謝 凱雯	38
高井 透	39
藤瀬 武彦	40
藤田 晴啓	41
藤田 美幸	42
阿部 聡	43
小宮山 智志	44
佐々木 桐子	45
山下 功	46
今井 裕紀	47
経営情報学部 情報システム学科	49
阿部 淑人	51
安藤 篤也	52
石井 忠夫	53
宇田 隆幸	54
梅原 英一	55
桑原 悟	56
小林 満男	57
佐藤 恵一	58
近山 英輔	59
河原 和好	60



学 長

氏 名	オチ トシオ
	越智 敏夫 OCHI Toshio
職 名	学長（2022年4月）
連 絡 方 法	E-mail : tochi@nuis.ac.jp
学 歴	1986年 立教大学法学部卒業
	1992年 慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程単位取得満期退学
職 歴	1992 ～ 1994年 立教大学法学部助手
	1994 ～ 1996年 シカゴ大学研究員
	1996年 新潟国際情報大学専任講師（1999年 助教授、2006年 教授）
	2002 ～ 2003年 ニューヨーク大学研究員
	2017年 ノースカロライナ大学チャペルヒル校研究員
	2018年 カリフォルニア大学ロサンゼルス校客員教授
	現代政治理論、政治文化論、アメリカ政治論
研 究 分 野	
主 要 業 績	主要著書
	越智敏夫（2022）.『10代のうちに知っておきたい政治のこと』あかね書房（監修）. 越智敏夫（2018）.『政治にとって文化とは何か』ミネルヴァ書房. 越智敏夫（2007）.「市民文化論の統合的機能：現代政治理論の『自己正当化』について」市川太一・梅垣理郎・柴田平三郎・中道寿一（編）『現場としての政治学』（pp. 89-112）. 日本経済評論社. 越智敏夫（2003）.「なぜ市民社会は少数者を必要とするのか：出生と移動の再理論化」高島通敏（編）『現代市民政治論』（pp.195-216）. 世織書房.
	主要論文
	OCHI,T., “Apocalyptic Memories and Subjective Movements:Differentiation by Political Power in Postwar Japan,” <i>Boundary 2</i> , Summer 2015:Volume 42, Number 3, 55-63.
	越智敏夫（2011）.「強制される忠誠：フィランソロピーとリベラル・ナショナリスト」『年報政治学』2011-I, 政治における忠誠と倫理の理念化, 93-112.
	越智敏夫（2007）.「アメリカ国家思想の文化的側面：その政府不信と体制信仰について」『政治思想研究』（7）, 32-56.

国際学部 国際文化学科

井堂 有子

臼井 陽一郎

區 建英

佐々木 寛

澤口 晋一

申 銀珠

矢口 裕子

山田 裕史

吉澤 文寿

熊谷 卓

小林 伊織

鈴木 俊弘

鈴木 佑也

瀬戸 裕之

中村 貴

藤本 直生

リューデ アンナ

佐藤 泰子

ジュリアス マルティネス

シンシア スミス





氏名	井堂 有子 IDO Yuko
職名	教授 (2024年4月)
連絡方法	ido@nuis.ac.jp
学歴	1999年 旧大阪外国語大学外国語学部卒業 2001年 東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了 2005年 オランダ国立社会科学研究所修士課程修了 2017年 東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学
学位	開発学修士 (オランダ国立社会科学研究所、2005年12月)
職歴	2001～2004年 エジプト日本大使館 専門調査員 2006～2007年 広島大学研究員 2007～2010年 国際協力機構在シリア事務所企画調査員 2010～2012年 国際協力機構在スーダン専門家 (プロジェクト・マネジメント) 2013～2015年 国際基督教大学アジア文化研究所準研究員 (15～20年研究員) 2019～2020年 上智大学イスラーム研究センター特別研究員 2020～2023年 日本国際問題研究所研究員 2020～2024年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー 2024年4月～現在 現職 他、昭和女子大学、日本社会事業大学等で非常勤講師、翻訳・通訳等 https://researchmap.jp/7000029069
研究分野	中東地域研究、開発学。特にエジプトを中心とした中東・北アフリカの食糧安全保障を研究テーマとしている。近年、「食と農」への関心を強くし、日本・他地域の課題、実践と理論からも学ぼうとしている。
主要業績 (直近のもの)	著書 (2023)『移行期にある国際秩序と中東・アフリカ』日本国際問題研究所、pp. 187-204 (2022)『胃袋を満たす国家の戦略：戦後日本、インド、エジプトの事例より』上智大学イスラーム研究センター、pp. 30-63 (2021)『日本の国際協力 中東・アフリカ編』ミネルヴァ書房、pp. 92-101 (2020)『新 世界の社会福祉 第II期 6巻』旬報社、pp. 419-443 論文 (2024)「『人間の安全保障』としての食糧問題—ウクライナ戦争と中東・アフリカ、そしてガザの飢餓戦争—」『農業と経済』2024年春号90巻2号、pp. 48-57 (2024)「食糧・人道危機とグローバルな二重基準問題——ウクライナとガザの事例より」『Cosmopolis』No.18、pp.13-27 (2023)「エジプトの食糧不安——対外依存と都市の脆弱層、食糧補助金制度を中心に——」(共同執筆者：岩崎えり奈)『アジア・アフリカ研究』63巻3号、pp.2-24
所属学会	国際開発学会、日本中東学会
その他	競争的資金 (2024～2027年度) 科研費・基盤研究 (C) (一般)『米国PL480と中東・アフリカ——穀物輸入依存の歴史的起源に関する政治経済学的研究』(研究代表者) (2023～2024年度) 科研費・学術変革領域研究 (A) 公募研究『有事と食糧—中東・北アフリカにおいて試されるコネクティビティと信頼構築』(研究代表者)



氏 名
職 名
連絡方法
学 歴

学 位
職 歴
研究分野
主要業績

ウスイ ヨウイチロウ

臼井 陽一郎 USUI Yoichiro

教授 (2005年4月)

E-mail : usui@nuis.ac.jp / LINE : usui1965

1989年 早稲田大学社会科学部卒業

1992年 早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了

1995年 早稲田大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学

修士 (経済学)、MA by research (リーズ大学大学院法学研究科)

1994 ~ 1996年 早稲田大学社会科学部助手

EU政治

著書

- ① 臼井陽一郎・中村英俊 (編著) (2023) 『EUの世界戦略と「リベラル国際秩序」のゆくえ：ブレグジット、ウクライナ戦争の衝撃』明石書店.
- ② 臼井陽一郎 (監訳) (2020) 『トライバル化する世界：集合的トラウマがもたらす戦争の危機』(クルト・ドゥブーフ著) 明石書店.
- ③ 臼井陽一郎 (編著) (2020) 『変わりゆくEU:永遠平和のプロジェクトの行方』明石書店.
- ④ 臼井陽一郎 (編著) (2015) 『EUの規範政治：グローバルヨーロッパの理想と現実』ナカニシヤ出版.
- ⑤ 臼井陽一郎 (2013) 『環境のEU、規範の政治』ナカニシヤ出版.
- ⑥ 松尾秀哉・臼井陽一郎 (編著) (2013) 『紛争と和解の政治学』ナカニシヤ出版.
- ⑦ 中村民雄・須網隆夫・臼井陽一郎・佐藤義明 (2008) 『東アジア共同体憲章案：実現可能な未来をひらく論議のために』昭和堂.

論文

- ① 臼井陽一郎 (2025) 「EUフォンデアライエン新体制の「重い課題」」『外交』第89号
- ② 臼井陽一郎 (2024) 「2024年欧州議会選挙について：民主主義の発展か、EU政治の停滞か」国際問題研究所研究レポート2024-07-03
- ③ 臼井陽一郎 (2024) 「欧州議会と欧州懐疑主義:欧州保守改革グループ(ECR)の場合」『新潟国際情報大学国際学部紀要』第9号
- ④ 臼井陽一郎 (2023) 「グリーンヨーロッパの域外規制力：EU炭素国境調整メカニズム (CBAM) を事例に」『EUの規範形成パワーの展望—グリーン・デジタル・人権』日本経済研究センター研究報告書「欧州研究」.
- ⑤ 臼井陽一郎 (2015) 「EUの対外行動にみる規範政治の諸相—近隣クロスボーダー協力 (ENICBC) を事例に」『グローバル・ガバナンス』第2号, 68-81.
- ⑥ 臼井陽一郎 (2015) 「EUのマルチレベル・ガバナンス論—その統合理論としての意義の再考」『国際政治』第182号, 16-29.
- ⑦ 臼井陽一郎 (2009) 「EUの持続性戦略と欧州統合の行方」『日本EU学会年報』第29号, 83-103.
- ⑧ USUI, Y. (2007) The Democratic Quality of Soft Governance in the EU Sustainable Development Strategy : A Deliberative Deficit. *Journal of European Integration*, 29 (5), 619-633.
- ⑨ USUI, Y. (2006) The Roles of Soft Law in EU Environmental Governance: An Interface between Law and Politics. 『日本EU学会年報』(26), 20-62.
- ⑩ USUI, Y. (2003) Evolving Environmental Norms in the European Union. *European Law Journal*, 9 (1), 69-87.

所属学会

UACES (英国EU学会)、日本EU学会、国際政治学会
日本政治学会、日本比較政治学会、グローバル・ガバナンス学会



氏名
職 名
連 絡 方 法
学 位
職 位

オウ ケンエイ

區 建英 OU Jianying

教授 (1998年4月)

E-mail : ou@nuis.ac.jp

1982年 広州外国語大学 日本語文学科卒業

1984年 北京師範大学歴史学系修士課程卒業 (文学修士)

1993年 東京大学大学院博士課程修了

博士 (学術、東京大学、1993年3月)

1985 ~ 1993年 (中国) 暨南大学歴史学部専任講師

1988 ~ 1995年 学習院大学文学部兼任講師

1993 ~ 1994年 東京大学教養学部客員研究員

1994 ~ 1997年 新潟国際情報大学助教授

2015 ~ 2016年 中国 南開大学客員研究員、北京大学客員教授

1995 ~ 現在 慶應義塾福沢研究センター客員研究員

受 賞 歴

2021年1月 中国社会科学院日本研究所 第12回優秀論文「隅谷賞」受賞 (「隅谷賞」とは、隅谷三喜男先生の基金によって中国社会科学院で設立された学術賞で、日本研究の優秀論文を表彰するものである)。

研 究 分 野

思想史学：日本政治思想史、中国近代思想史。中国の民主化への関心から思想史を研究する。恩師・丸山眞男先生の思想史学から叡智を吸収して、中国の民主化という課題の研究に活用する。

主 要 業 績

著書

- ① 區建英 (単著) (2009).『自由と国民 厳復の模索』東京大学出版会.
- ② 區建英 (単訳) (2018).『福澤諭吉と日本近代化』(第三版) 原著者・丸山眞男, 北京師範大学出版社 (第一版1992年, 第二版1997年).
- ③ 區建英 (単訳) (2016).『東亜的王権と思想』原著者・渡辺浩, 上海古籍出版社 (2020年 上製版).
- ④ 區建英 (共著) (2022).「丸山眞男思想中の「永恆與時間」, 「從丸山眞男的「古層」視點看日本的歷史意識」黃俊傑・安藤隆穗編『東亞思想交流史中的脈絡性轉換』(pp. 285-320, 321-357). 國立臺灣大學人文社會高等研究院東亞儒學研究中心.
- ⑤ 區建英 (共著) (2016).「孫中山「民權主義」的時空轉換與創造」潘朝陽編『儒家道統與民主共和』(pp. 41-76), 臺灣師範大学出版社.
- ⑥ 區建英 (共著) (2013).「嚴復——国民の自由を求めた非主流の思想家」趙景達等編『東アジアの知識人 I 文明と伝統社会』(pp. 118-134), 有志舎.
- ⑦ 區建英 (共著) (2011).「日清戦争の衝撃と近代国家形成——中国」, 「侵略と抗日——中国」米原謙・金鳳珍・區建英『東アジアのナショナリズムと近代』(pp. 101-143, 249-290). 大阪大学出版会.
- ⑧ 區建英・陳力衛 (共訳) (2024).『忠誠與叛逆——日本轉型期精神史的多重面向』原著者・丸山眞男, 台灣聯經出版公司.
- ⑨ 區建英・劉岳兵 (共訳) (2009).『日本の思想』原著者・丸山眞男, 生活・読書・新知 三聯書店.

論文

- ① 區建英 (2019).「丸山眞男對中國現代性的看法」『臺灣東亞文明研究學刊』16 (1), 189-219.
- ② 區建英 (2019).「丸山眞男思想史学的軌跡」中国社会科学院『日本学刊』第3期 (「隅谷賞」2021年受賞論文), 136-166.
- ③ 區建英 (2016).「丸山眞男與福澤諭吉思想中の「獨立自尊」與「他者感覺」臺灣大學人文社會高等研究院『臺灣東亞文明研究學刊』13 (1), 107-146.
- ④ 區建英 (2015).「丸山眞男の方法と中国思想の省察」『戦後日本思想と東アジア——知識人と民衆——』同志社大学人文科学研究所, 人文研ブックレットNo.49, 27-45.
- ⑤ 區建英 (2011).「丸山眞男と私の中国研究」東京大学出版会『UP』vol.462 (April 2011), 51-57.
- ⑥ 區建英 (2008).「清末中国の国粹派と明治日本の国粹主義」ソウル大学校奎章閣国学研究院『韓国文化』41 (6), 158-181.
- ⑦ 區建英 (2008).「嚴復的“会通”与自由」『福州大学学报』[哲学社会科学版] vol.2, 31-36.
- ⑧ 區建英 (1998).「丸山眞男における国民国家と永久革命」歴史学研究会編『歴史学研究』708 (3), 31-40.
- ⑨ 區建英 (1995).「励みと悲しみ——近代中国と日本」岩波書店『世界』1995年3月号, 150-159.
- ⑩ 區建英 (1992).「福澤諭吉研究と丸山眞男」みすず書房『みすず』vol.379 (October 1992), 21-26.

所 属 学 会

中国社会文化学会・アジア政経学会・政治思想学会・日本思想史学会・American Political Science Association

そ の 他

1986年に東京大学大学院で日本思想を研究するために来日。



氏名
職名
連絡方法
学歴
学位
職歴

ササキ ヒロシ

佐々木 寛 SASAKI Hiroshi

教授 (2008年4月)

E-mail : shiroshi@nuis.ac.jp

1996年 中央大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学

法学修士 (中央大学、1993年3月)

1996年～ 1998年 立教大学法学部助手

1998年～ 2000年 日本学術振興会特別研究員 (PD)・中央大学法学部兼任講師

2000年～ 2003年 新潟国際情報大学情報文化学部専任講師 (～ 2008年 同大准教授)

2008年～ 2009年 カルフォルニア大学バークレー校客員研究員

研究分野
主要業績

民主主義理論・安全保障理論

著書・論文・訳書

- ① 「『文明』 転換への挑戦 ― エネルギー・デモクラシーの論理と実践」『世界』 2020年1月号
- ② 「『エネルギー・デモクラシー』 の挑戦 ― 新潟県の新発検証委員会について」『日本原子力学会誌』 Vol.59、No.12、2017年
- ③ 「政治理論における〈核〉の位置づけに関する若干の考察―『3・11』後の政治学のために」『立法法学』 第86号 (立教大学)、2012年1月
- ④ 「『グローバル・シティズンシップ』の射程」『立命館法学』 第333・334号 (立命館大学)、2011年3月
- ⑤ 『地方自治体の安全保障』 (明石書店) (共編著)、2010年8月
- ⑥ 「現代の平和主義」千葉眞編『平和の政治思想史』 (おうふう)、2009年8月
- ⑦ P.ハースト『戦争と権力』 (岩波書店) (単訳)、2009年2月
- ⑧ 「『新しい戦争』と日本―漂流する『安全保障』」岩崎稔他編『戦後日本スタディーズ③』 (紀伊國屋書店)、2008年12月
- ⑨ 「『平和』と『コミュニティ』 ― グローバル化時代の『暴力』を越えて」宮島喬・五十嵐暁郎編『平和とコミュニティ―平和研究の新次元』 (明石書店)、2007年9月
- ⑩ 『東アジア〈共生〉の条件』 (世織書房) (編著)、2006年3月
- ⑪ 「『戦争』を再考する」岡本三夫・横山正樹編『平和学のアジェンダ』 (法律文化社)、2005年5月
- ⑫ 『東アジア安全保障の新展開』 (明石書店) (共編著)、2005年4月
- ⑬ 「イラク戦争と『安全保障』 概念の基層」古城利明編『世界システムとヨーロッパ』 (中央大学出版部)、2005年3月
- ⑭ 「世界政治と市民 ― 現代コスモポリタニズムの位相」高島通敏編『現代市民政治論』 (世織書房)、2003年2月
- ⑮ 「Atom-Politics in East Asia : Towards a Border-less Democracy」『情報文化学部紀要』 第5号 (新潟国際情報大学)、2002年3月
- ⑯ 『平和研究 第26号 ― 新世紀の平和研究』 (早稲田大学出版部) (編著)、2001年11月
- ⑰ 「グローバルな『全体主義』と『新しい戦争』」『歴史地理教育』 第612号、2000年8月
- ⑱ 「『地球社会』と民主主義原理 ― 『オタワ・プロセス』を考える」『立教法学』 第55号 (立教大学)、2000年4月
- ⑲ 「『グローバル・デモクラシー』論の構成とその課題 ― D.ヘルドの理論をめぐって」『立教法学』 第48号 (立教大学)、1998年2月
- ⑳ 「平和研究の理論的地平 ― 21世紀の平和秩序を求めて」『平和研究』 第20号 (日本平和学会)、1996年6月

所属学会

日本国際政治学会 (将来構想委員、2013年研究大会実行委員長)
日本平和学会 (第21期会長) 日本政治学会 (企画委員) など。



氏名	澤口 晋一 SAWAGUCHI Shin-ichi
職名	教授（2005年4月）
連絡方法	E-mail : sawashin@nuis.ac.jp
学歴	1983年 明治大学文学部史学地理学科地理学専攻卒業 1985年 明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士前期課程修了 1992年 明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士後期課程単位取得満期退学
学位	博士（地理学）明治大学, 2001年3月
学歴	1990 ～ 1992年 日本学術振興会特別研究員 1996年 新潟国際情報大学情報文化学部専任講師 1999年 同助教授 2005年 同（現 国際学部）教授
研究分野	地理学 研究テーマ：・新潟砂丘と潟の成因に関する地形学的研究 ・高緯度極地と中緯度高山山地における周氷河斜面プロセスの比較研究
主要業績	著書 ① 澤口晋一（2018）.「越後平野の生い立ち①―川を引き寄せた地殻変動―」他, 新潟市潟環境研究所編『みんなの潟学』（pp.6-7ほか）. 新潟市. ② 澤口晋一（2013）.「化石周氷河現象と氷期の凍土環境の復元」他, 日本第四紀学会編『デジタルブック最新第四紀学（改訂版）』（pp.154-175）. 第四紀学会. ③ 澤口晋一（2005）.「周氷河作用」他, 小嶋 尚研究室編『山に学ぶ ― 歩いて観て考える山の自然』（pp.37-60, 126-129）. 古今書院. ④ 澤口晋一（2005）.「化石周氷河現象から見た氷期の北上川上流域と北上山地」他, 小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編『日本の地形3 東北』（pp.55-59）. 東京大学出版会. 論文 ① 澤口晋一（2022）.「北上山地の小起伏面と周氷河地形」『地図中心』599, 16-17. ② 澤口晋一（2022）.「新潟砂丘―知られざる地形の今―」『地図中心』600, 9-11. ③ 澤口晋一（2018）.「新潟市の砂丘地にみられる湖沼とその成因」『平成29年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書』4-14. ④ 澤口晋一（2017）.「新潟砂丘西南端地域の地形」『平成28年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書』115-135. ⑤ 澤口晋一（2012）.「アラスカ中部イーグルサミットにおける地温と凍上および斜面物質移動の観測」『地学雑誌』120（6）, 332-341. その他 ① 新潟市里潟研究ネットワーク編（2025）『5潟ガイドブック』新潟市. ② 新潟市里潟研究ネットワーク編（2024）『福島潟ガイドブック』新潟市. ③ 新潟市里潟研究ネットワーク編（2023）『佐渡・御手洗潟ガイドブック』新潟市. ④ 新潟市里潟研究ネットワーク編（2022）『上堰潟・仁箇堤ガイドブック』新潟市. ⑤ 新潟市里潟研究ネットワーク編（2021）『じゅんさい池ガイドブック』新潟市. ⑥ 新潟市里潟研究ネットワーク編（2020）『十二潟ガイドブック』新潟市. 所属学会その他 日本地理学会, 日本第四紀学会, 東北地理学会, 東京地学協会 ・1990 ～ 1992年および1994年夏期, 北極圏スバルバル諸島調査 ・2001, 2002年夏期, カナダ北極圏エルズミア島・アクセルハイベルグ島調査. ・2004年, アラスカ大学フェアバンクス校客員研究員 ・2019年～新潟市里潟研究ネットワーク会議座長 ・2024年～ NPO法人新潟市湿地都市研究所副理事長



氏 名
職 名
連絡方法
学 歴
学 位
職 歴
研究分野
主要業績

シン ウンジュ

申 銀珠 SHIN Eunju

教授 (2001年4月)

E-mail : shin@nuis.ac.jp

韓国外国語大学及び大学院 (修士課程) 修了後、
お茶の水女子大学大学院人文科学研究科及び人間文化研究科修了

博士 (人文科学、お茶の水女子大学、1995年3月)

日本学術振興会外国人特別研究員 (1999年5月～ 2001年3月)

日本と韓国の近現代文学

現在の研究テーマ：日本統治期の「朝鮮」を描いた韓国と日本の文学作品の世界

論文

- ① 申銀珠 (2023) 「朴景利の対日認識と歴史観に関する考察 —『土地』に描かれた日本・日本人・日本論を中心に—」 小山田紀子 (他) (編) 『植民地化・脱植民地化の比較史』 藤原書店, 402-430
- ② 申銀珠 (2006) 「予感する〈女〉たち — 韓国語訳『ジョゼと虎と魚たち』をめぐって —」 菅聡子 (編) 『国文学解釈と鑑賞 別冊 田辺聖子』 至文堂, 240-249
- ③ 申銀珠 (2006) 「『朴景利『土地』に描かれた日本・日本人像』 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 9, 19-27
- ④ 申銀珠 (2006) 「中野重治と日本の天皇制—「雨の降る品川駅」「五勺の酒」を中心に—」 『日本近代文学—研究と批評4』 (韓国日本近代文学会) (韓国語) 101-121
- ⑤ 申銀珠 (2004) 「ソウルの異邦人、その周辺—李良枝『由熙』をめぐって—」 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 7, 1-15
- ⑥ 申銀珠 (2002) 「中野重治、詩的精神の憤怒の行方—〈君らの叛逆する心は別れの一瞬に凍る〉をめぐって」 『国文学 解釈と教材の研究』 47 (1) 學燈社, 70-77
- ⑦ 申銀珠 (2001) 「『雨の降る品川駅』・中野重治・『五勺の酒』—民族・民族問題をめぐって—」 『淵叢』 10 (淵叢の会) 67-83
- ⑧ 申銀珠 (1998) 「中野重治と韓国プロレタリア文学運動 — 林和、李北満との関係を中心として —」 『日本研究』 12 (韓国外国語大学校日本研究所) (韓国語) 187-227
- ⑨ 申銀珠 (1994) 「〈朝鮮〉から見た中野重治 — 植民地知識人の自画像を求めて —」 『国際日本文学研究集会会議録』 17 (国文学研究資料館) 121-144
- ⑩ 申銀珠 (1993) 「韓国近代文学の中の日本文学 — 『創造』『廃墟』の翻訳詩を中心として」 『人間文化研究年報』 16 (お茶の水女子大学人間文化研究科) 113-124

所属学会
その他

日本近代文学会、朝鮮学会、お茶の水女子大学国語国文学会

<翻訳>

- ① 玄月 『蔭の棲みか』 (文学トンネ, 2000.11) (共訳)
- ② 玄月 『悪い噂』 (文学トンネ, 2002.11) (共訳)
- ③ 堀江敏幸 『熊の敷石』 (文学トンネ, 2005.3) (共訳)
- ④ 平野啓一郎 『滴り落ちる時計たちの波紋』 (文学トンネ, 2008.2) (共訳)
- ⑤ 平野啓一郎 『あなたが、いなかった、あなた』 (文学トンネ, 2008.9) (共訳)

<書評>

申銀珠 (2023) 「廣瀬 陽一著『中野重治と朝鮮問題—連帯の神話を超えて—』」 『日本近代文学』 107, 125-128

<紹介>

申銀珠 (2003) 「韓国日本近代文学会編著『日本近代文学—研究と批評—1』」 『日本近代文学』 68, 265

ソウル大学奎章閣韓国学研究院客員研究員 (2013 ~ 2014)

氏名
連絡方法ヤグチ ユウコ
矢口 裕子 YAGUCHI Yuko
教授 (2011年4月)

E-mail : yaguti@nuis.ac.jp

学歴

1985年3月 法政大学文学部英文学科卒業
1991年3月 法政大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了
1994年3月 法政大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程満期退学
文学修士 (法政大学、1991年3月)
東京医科歯科大学非常勤講師 (1994年4月～2001年3月)
アメリカン大学パリ校客員研究員 (2015年8月～2016年2月)
ニューヨーク市立大学客員研究員 (2016年3月～2016年8月)

受賞歴

第3回女性学研究国際奨励賞 (1996年7月14日)
アメリカ文学、ジェンダー・セクシュアリティ研究。
アナイス・ニン、サム・シェパード等のアメリカ文学をジェンダー・セクシュアリティ研究の視点から再読・再評価する。

主要業績

著書

- ① 山本豊子編 (2024)、「さえすり機械への頌歌—冥王まさ子と矢川澄子のグリンプス」138-151.『アナイス・ニン文学への視点』三修社
- ② Herron, P. (Ed.), (2023), Introduction, iv-vii. *Twittering Machine of Paradise*, 15-30. A Spy in the House of Sexuality, 132-145. *The Text That Is the Winter*, 174-187. *Critical Analysis of Anais Nin in Japan*. Sky Blue Press.
- ③ 矢口裕子 (2023)『アナイス・ニンの魂と肉体の実験室』小鳥遊書房
- ④ Yaguchi, Y. (2021). *Anais Nin's Paris Revisited: The English & French Bilingual Edition*. wind rose-suisseisha.
- ⑤ 矢口裕子ほか訳、アナイス・ニン著 (2020)『アナイス・ニンとの対話—インタビュー集』鳥影社
- ⑥ Herron, P. (Ed.). (2019). *Twittering Machine of Paradise: Glimpses of Two of Anais Nin's Japanese Daughters*, 18-30. *A Café in Space: The Anais Nin Literary Journal, Anthology 2003-2014*. Sky Blue Press.
- ⑦ 矢口裕子 (2019).『アナイス・ニンのパリ、ニューヨーク—旅した、恋した、書いた』水声社。
- ⑧ アナイス・ニン研究会編 (2018).『近親相姦の家』『人工の冬』18-32.『憧れの矢』183-186.『アナイス・ニン ニューヨークの文学地図』189-190.『分身』『日本におけるアナイス・ニン受容』199-209.『作家ガイド アナイス・ニン』彩流社。
- ⑨ 矢口裕子編訳、アナイス・ニン著 (2017)『アナイス・ニンの日記』水声社
- ⑩ 矢口裕子ほか訳、トリン・ミンハ著 (2016)『フレイマー・フレイムド』水声社
- ⑪ 小林富久子監修 (2014).『沈黙を歌う—マキシーン・ボン・キングストン『チャイナタウンの女武者』』249-262.『憑依する過去—アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』金星堂。
- ⑫ 矢口裕子訳、アナイス・ニン著 (2009)『人工の冬』水声社
- ⑬ 佐々木寛編 (2006).『境界を吹く風—新しい女性表現と『慰安婦』問題』272-286.『東アジア〈共生〉の条件』世織書房。

論文

- ① 矢口裕子 (2022)「オノ・ヨーコのオリエンタリスト／フェミニスト・パフォーマンス—Cut PieceとGet Back」『AALA Journal』(28), 23-31.
- ② Yaguchi, Y. (2018). Singing Silence on the Planet with Maxine Hong Kingston's, *The Woman Warrior*.『新潟国際情報大学国際学部紀要』(3), 29-40.
- ③ Yaguchi, Y. (2014). *Winter of Artifice: An Odyssey—Anais Nin's Lost Work. A Café in Space: The Anais Nin Literary Journal*, 11, 32-40.
- ④ Yaguchi, Y. (2013). Anais Nin's Buried Child: Translator's Afterword to the Japanese Version of *The Winter's Artifice* (the Paris Edition, 1939). *Nexus: The International Henry Miller Journal*, (10), 135-146.
- ⑤ 矢口裕子 (2009).「想像の父を求めて—『インセスト』論への前奏曲」『水声通信』(31), 135-144.
- ⑥ 矢口裕子 (2009).「アナイス・ニン『人工の冬』パリ版という旅」『水声通信』(28), 23-35.
- ⑦ 矢口裕子 (2007).「『アナイス・ニンの「ジュナ」—『人工の冬』パリ版から」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(10), 57-60.
- ⑧ Yaguchi, Y. (2007). A Spy in the House of Sexuality: Rereading Anais Nin through *Henry & June*. *A Café in Space: Anais Nin Literary Journal*, 4, 22-34.
- ⑨ 矢口裕子 (2005).「ロマンティック・クイアー草野マサムネ ジェンダー試論」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(8), 39-50.
- ⑩ 矢口裕子 (2004).「アナイス・ニンの娘たち—冥王まさ子と矢川澄子のグリンプス」『新潟ジェンダー研究』(5), 5-12.
- ⑪ Yaguchi, Y. (2003). *Twittering Machine of Paradise—Glimpses of Two of Anais Nin's Japanese Daughters. A Café in Space: Anais Nin Literary Journal*, 1, 106-117.
- ⑫ 矢口裕子 (2003).「性/愛の家のスパイ—Henry&Juneから読み直す Anais Nin」『英文学研究』(80), 13-25.
- ⑬ 矢口裕子 (2000).「『パリ、テキサス』あるいは砂漠のロマンス」『アメリカ演劇』(12), 65-85.
- ⑭ Yaguchi, Y. (2000). The Imaginary Father. *Anais: An International Journal*, 18, 46-60.
- ⑮ Yaguchi, Y. (1998). The Text That Is the Writer—Anais Nin's Diary. *Anais: An International Journal*, 16, 49-60.
- ⑯ 矢口裕子 (1996).「Sam Shepard, A Lie of the Mind — 新しいイヴの歌」『アメリカ文学研究』(32), 57-74.
- ⑰ 矢口裕子 (1994).「Sam Shepard, Fool for Love — カウボーイが女を愛する時」『英文学誌』(36), 65-85.
- ⑱ Yaguchi, Y. (1993). Anais Nin: Another Woman Not in the Novels (II).『法政大学大学院紀要』(30), 55-74.
- ⑲ Yaguchi, Y. (1992). Anais Nin: Another Woman Not in the Novels (I).『法政大学大学院紀要』(28), 67-84.

所属学会

日本アメリカ文学会、日本英文学会、日本女性学会



氏名
職名
連絡方法
学歴

ヤマダ ヒロシ

山田 裕史 YAMADA Hiroshi

教授 (2024年4月)

E-mail : hyamada@nuis.ac.jp

2000年3月 関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業

2005年3月 上智大学大学院外国語学研究科国際関係論専攻博士前期課程修了

2008年3月 上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻博士後期課程満期退学

学位
職歴

博士 (地域研究) (上智大学、2011年9月)

2008年 4月～ 2011年3月 上智大学アジア文化研究所特別研究員 (PD)

2008年10月～ 2011年3月 東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム (HSP) 特任研究員

2011年 4月～ 2014年3月 日本学術振興会特別研究員 (PD・東京大学)

2014年10月～ 2015年3月 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構持続的平和研究センター特任研究員

受賞歴
研究分野

秋野豊ユーラシア基金「第7回秋野豊賞」受賞 (2005年6月)

カンボジア研究、比較政治学、国際協力論

「独裁体制はなぜ続くのか」という問題意識のもと、政党、選挙、議会等の民主的な政治制度が独裁体制の維持にどのような役割を果たしているのか、そのメカニズムを明らかにすべく、カンボジアで45年以上も続く人民党支配について研究しています。

主要業績

【著書】(2022年以降)

- ① 山田裕史 (2025) . 「1980-1989 年のカンボジア：内戦と国際的孤立のなかでの国家再建」日本貿易振興機構アジア経済研究所『アジア動向年報1980-1989：カンボジア編』(pp.1-6) . 日本貿易振興機構アジア経済研究所.
- ② 山田裕史 (編著) (2024) . 『強化されるフン・セン体制：2023 年カンボジア総選挙と世襲内閣の誕生』日本貿易振興機構アジア経済研究所.
- ③ 山田裕史 (2024) . 「民主主義を装う独裁：体制移行後のカンボジア政治の展開」小林知 (編著)『カンボジアは変わったのか?：「体制移行」の長期観察 1993 ～ 2023』(pp. 41-95) . めこん.
- ④ 山田裕史・新谷春乃 (2024) . 「フン・セン首相の辞任と世襲内閣の発足」日本貿易振興機構アジア経済研究所『アジア動向年報2024』(pp. 219-240) . 日本貿易振興機構アジア経済研究所.
- ⑤ 山田裕史 (2024) . 「体制維持に資する選挙機能の多様性とその限界：人民党支配下のカンボジアにおけるコミュン評議会選挙」山田紀彦 (編著)『権威主義体制にとって選挙とは何か：独裁者のジレンマと試行錯誤』(pp.117-149) . ミネルヴァ書房.
- ⑥ 山田裕史 (2022) . 「カンボジア王国：人民党支配下における汚職取締と体制維持」外山文子・小山田英治 (編著)『東南アジアにおける汚職取締の政治学』(pp. 255-279) . 晃洋書房.
- ⑦ 山田裕史 (2022) . 「カンボジア：シハヌークによる政治権力の独占と王政の成立」粕谷祐子 (編)『アジアの脱植民地化と体制変動：民主制と独裁の歴史的起源』(pp. 457-484) . 白水社.

【論文】(2022年以降)

- ① 山田裕史 (2024) . 「カンボジア：選挙を通じた権威主義体制の強化」『ワセダアジアレビュー』26, 72-75.
- ② 山田裕史 (2023) . 「権力は移譲されたのか?：カンボジアにおける「世襲政権」の誕生」『IDE スクエア：世界を見る眼』11, 1-13.
- ③ 山田裕史・新谷春乃 (2023) . 「世襲環境が整う：2023年カンボジア総選挙」『IDE スクエア：世界を見る眼』8, 1-11.
- ④ 山田裕史・新谷春乃 (2023) . 「安定的な世襲の実現に向けて：2023年カンボジア総選挙」『IDE スクエア：世界を見る眼』7, 1-12.
- ⑤ 山田裕史 (2022) . 「独裁強化と世襲に動くカンボジア政治：2022年コミュン評議会のもつ意味」『IDEスクエア：世界を見る眼』8, 1-15.

所属学会

東南アジア学会、日本比較政治学会、日本国際政治学会、日本平和学会

氏職
連絡
学方
学歴学
職
位
歴研 究 分 野
主 要 業 績

所 属 学 会

そ の 他

ヨシザワ フミトシ

吉澤 文寿 YOSHIZAWA Fumitoshi

教授 (2011年4月)

E-mail: yosizawa@nuis.ac.jp

1992年3月 東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程卒業

1995年3月 東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了

2004年7月 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了

社会学博士 (一橋大学、2004年7月)

2000年 3月～2002年2月 韓国湖南大学校外国語学部日本語科専任講師

2002年10月～2006年3月 東京学芸大学・青山学院大学・関東学院大学・大東文化大学・明星大学非常勤講師

2006年 4月～2011年3月 新潟国際情報大学情報文化学部准教授

2014年10月～2015年3月 東京大学大学院情報学環客員研究員

2016年 8月～2017年7月 米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校東アジア太平洋研究センター客員研究員

朝鮮現代史、日朝関係史

著書

〔単著〕

① 吉澤文寿 (厳泰奉訳) (2022). 『韓日会談1965 戦後韓日関係の原点を検証する』 イダムブックス (ソウル).

② 吉澤文寿 (李賢周 訳) (2019). 『現代韓日問題の起源 韓日会談と戦後韓日関係』 一潮閣 (ソウル).

③ 吉澤文寿 (2015). 『[新装新版] 戦後日韓関係 国交正常化交渉をめぐって』 クレイン.

④ 吉澤文寿 (2015). 『日韓会談1965 戦後日韓関係の原点を検証する』 高文研.

〔編著〕

① 小山田紀子、ウォルター・ブリュイエール＝オステル、吉澤文寿 (編) (2023) 『植民地化・脱植民地化の比較史：フランス・アルジェリアと日本—朝鮮関係を中心に』 藤原書店.

② 吉澤文寿 (編) (2021). 『日韓会談研究のフロンティア：「1965年体制」への多角的アプローチ』 社会評論社.

③ 吉澤文寿 (編) (2019). 『歴史認識から見た戦後日韓関係：「1965年体制」の歴史学・政治学的考察』 社会評論社.

④ 吉澤文寿 (編) (2016). 『五〇年目の日韓つながり直し：日韓請求権協定から考える』 社会評論社.

〔共同執筆〕

① 耽羅文化研究院 (編) (2024) 『済州4・3、麗順10・19の責任のための連帯』 図書出版オンセム (ソウル).

② 都時煥 (編) (2022). 『サンフランシスコ講和条約70年の歴史と課題』 東北亜歴史財団 (ソウル).

③ 松本ますみ・清末愛砂 (編) (2021). 『北海道で考える＜平和＞ 歴史的視点から現代と未来を探る』 法律文化社.

④ 東北亜歴史財団韓日歴史問題研究所 (編) (2019). 『韓日協定と韓日関係—1965年体制は克服可能か?』 東北亜歴史財団 (ソウル).

⑤ Nishino, R., Kim, P., & Onozawa, A. (Eds.). (2018). *Denying the Comfort Women Japanese State's Assault on Historical Truth*. Routledge.

⑥ 木宮正史・李元徳 (編) (2015). 『日韓関係史1965—2015 I 政治』 東京大学出版会.

⑦ 西野瑠美子・金富子・小野沢あかね (編) (2013). 『「慰安婦」バッシングを越えて「河野談話」と日本の責任』 大月書店.

⑧ 永原陽子 (編) (2009). 『植民地責任論—脱植民地化の比較史』 青木書店.

その他

① 佐渡鉦山・朝鮮人強制労働資料集編集委員会 (代表:吉澤文寿) (編) (2024) 『佐渡鉦山・朝鮮人強制労働資料集』 神戸学生青年センター出版部

② 浅野豊美・長澤裕子・吉澤文寿・金鉉洙・薦田真由美 (共編) (2010-2020). 『日韓国交正常化問題資料』 現代史料出版.

歴史学研究会、歴史科学協議会、朝鮮史研究会、日本平和学会、Association for Asian Studies (AAS) など

日韓会談反対運動に関する日常史研究—日本朝鮮研究所事務局長の日記分析を中心にして (日本学術振興会科学研究費助成事業、研究課題／領域番号19K01005、基盤研究C) など



氏名
職 務
学 歴
学 職

クマガイ タク

熊谷 卓 KUMAGAI Taku
准教授 (2004年4月)

E-mail : takuk@nuis.ac.jp

1991年3月 私立甲南大学法学部法学科卒業

2000年8月 広島大学大学院社会科学研究所後期博士課程法律学専攻単位取得退学
修士 (法学) (広島大学、1994年3月)、博士 (法学) (広島大学、2018年3月)

1995年～1999年 私立広島文教女子大学文学部非常勤講師

1997年～1999年 広島大学法学部助手

1998年～1999年 島根県立国際短期大学国際文化学科非常勤講師

2000年 私立福山大学経済学部非常勤講師

2000年 国立呉工業高等専門学校非常勤講師

2015年～2018年 広島大学法学部客員准教授

2019年～2020年 ニュージーランド・国立オークランド大学法科大学院客員准教授

研 究 分 野

国際法、国際刑事法。テロリズムや麻薬の不法な取引といった、国境を越える
犯罪の増加という問題を素材として、現代国際法が、如何にして諸国の多様な
利益 (主権) を調整しつつ、国際社会の共通利益 (共通の保護法益) を擁護し
ているのかということを現在の研究のテーマとしている。

主 要 業 績

著書

① 熊谷卓 (2121). 「国連安保理の制裁決議の国内実施と人権—カディ事件」
法判例百選 (第3版) 有斐閣, 224-225.

② 熊谷卓 (2010). 「『対テロ戦争』へのジュネーヴ諸条約の適用—ハムダン事件」
『国際法判例百選 (第2版)』有斐閣, 224-225.

③ 熊谷卓 (2002). 「外交・領事関係」水上千之編著『ファンダメンタル法学
講座 国際法』(pp. 117-134) 不磨書房.

論文

① Taku Kumagai (2023) "Foreign Terrorist Fighters and Domestic Counter —
Terrorist Measures: An Analysis of the Applicability of Japanese Legislation"
『新潟国際情報大学国際学部紀要』, (8), 15 ~ 30.

② 熊谷卓 (2019). 「人質占拠テロ事件と人質の保護: ヨーロッパ人権裁判所
2017年4月13日タガエバ (Tagayeva) 事件判決を素材として」『神奈川法学』
51 (3), 563-599

③ 熊谷卓 (2015). 「デジタル時代における国際人権: プライバシー vs. 安全」『国
際人権』(26), 34-36

④ 熊谷卓 (2013). 「テロリズムと国際人道法の関係に関する一考察 (戦争と
平和の法的構想)」『平和研究』(41), 73-101.

⑤ 熊谷卓 (2013). 「判例研究 イラン人に対するの国立大学附置研入学不許可
違憲訴訟 [東京地裁平成23.12.19判決]」『季刊教育法』(エイデル研究所)
(177), 100-106.

⑥ 熊谷卓 (2013). 「国際テロリズムと条約の役割 — 引渡しまたは訴追の規定
を中心に —」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(16), 65-80.

⑦ 熊谷卓 (2010). 「『対テロ戦争』へのジュネーヴ諸条約の適用—ハムダン事件」
『国際法判例百選 (第2版)』有斐閣, 224-225.

⑧ 熊谷卓 (2010). 「国際人権法と死刑」『法律時報』82 (7) 日本評論社) 48-52.

⑨ 熊谷卓 (2010). 「テロとは何か — 国連包括的テロ防止条約における『テロリ
ズム』の位置づけ —」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(13), 63-70.

⑩ 熊谷卓 (2009). 「テロリズムと人権—テロ被疑者の処遇を素材として—」『国
際法外交雑誌』108 (2), 91-119.

⑪ 熊谷卓 (2008). 「テロリズムを契機とする国家の国際法上の責任に関する
序論的考察」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(11), 15-29.

⑫ 熊谷卓 (2005). 「対テロ戦争と国際人権法—グアンタナモの被拘束者に対
する市民のおよび政治的権利に関する国際規約 (自由権規約) の適用可能
性—」『広島法学』29 (2), 81-116.

⑬ 熊谷卓 (2005). 「判例紹介 対テロ戦争と人権—グアンタナモの被拘束者を
めぐるアメリカ合衆国連邦最高裁の判断」『新潟国際情報大学情報文化学部
紀要』(8), 119-133.

⑭ 熊谷卓 (2004). 「判例紹介 テロリストと人身保護請求の可否—グアンタナ
モの被拘束者に関する5つの裁判例から」『新潟国際情報大学情報文化学部
紀要』(7), 119-159.

⑮ 熊谷卓 (2003). 「誰がテロリストを裁くのか?—合衆国軍事委員会と国際人
権法—」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(6), 87-101.

⑯ 熊谷卓 (2002). 「国家テロリズムと国際法—ロッカビー事件を手がかりとして」
『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(5), 115-154.

⑰ 熊谷卓 (1999). 「フランス共和国におけるテロリズムに対する国内法的規制
(一)」『広島法学』22 (3), 37-60.

⑱ 熊谷卓 (1999). 「フランス共和国におけるテロリズムに対する国内法的規制
(二・完)」『広島法学』22 (4), 117-138.

⑲ 熊谷卓 (1998). 「犯罪人引渡と国際テロリズム—フランス共和国の立法お
よび判例から」『広島法学』21 (3), 95-133.

⑳ 熊谷卓 (1997). 「欧州連合 (EU) と国際テロリズム」『広島法学』20 (3), 203-235.

所 属 学 会

世界法学会・国際法学会・米国国際法学会・国際人権法学会



氏名	コバヤシ イオリ 小林 伊織 Peter Iori Kobayashi
職名	准教授 (2021年4月)
連絡方法	E-mail : iorik@nuis.ac.jp
学歴	2009年6月 PhD course completed in English Language and Literature, Ateneo de Manila University (フィリピン) 2000年6月 MA in East Asian Studies, National Chengchi University (台湾) 1995年7月 BA (Hons) in South East Asian Studies, University of Hull (英国)
学位	MA in East Asian Studies
職歴	2022年7月 Trinity College London CertTESOL取得 2021年9月～2022年8月 銘伝大学 (台湾) 客員研究員 2003年2月～2015年7月 銘伝大学 (台湾) 英語センター専任講師 2002年9月～2003年6月 台北ヨーロッパ・スクール国際バカロレア日本文学教師 1998年9月～2002年9月 台湾TVBS (無線衛星電視台) 国際ニュースセンター記者
研究分野	World Englishes; English as a Lingua Franca; Language Policy and Planning; English Phonetics and Phonology; Southeast Asian Studies; Taiwan Studies
主要業績	<p>著書</p> <p>Kobayashi, P. I. (2020). English in Taiwan. In K. Bolton, B. Werner, & A. Kirkpatrick (Eds.), <i>The Handbook of Asian Englishes</i> (pp.547-567). Wiley-Blackwell. https://doi.org/10.1002/9781118791882.ch23</p> <p>論文</p> <p>① Kobayashi, P. I. (2023). From a foreign language to own language: Resolving conflicts over English education in Japan. <i>Asian Englishes</i>, 25 (2), 234-247</p> <p>② Kobayashi, P. I. (2020). The rise of China and local ethnic Chinese in Cambodia, <i>Ateneo Chinese Studies Program Lecture Series</i>, 7, 1-24.</p> <p>③ Kobayashi, P. I. (2020). American English phonological features on Singapore radio. <i>NUIS Journal of International Studies</i>, 5, 15-26.</p> <p>④ Kobayashi, I. (2012). "American English as an International Language" : Taiwanese views on English, from an EIL / ELF perspective. In <i>Proceedings for 2012 international conference and workshop on TEFL & applied linguistics</i>. Crane, 111-121.</p> <p>⑤ Kobayashi, I. (2009). Display of Malaysian English in Shirley Geok Lin Lim' s Sister Swing. In <i>Proceedings for 2009 international conference and workshop on TEFL & applied linguistics</i>. Taiwan: Crane, 190-201.</p> <p>⑥ Kobayashi, I. (2008). Expanding Circle learners in the Outer Circle: Understanding Taiwanese learners' views on L2 varieties of English. In <i>Proceedings for 2008 international conference and workshop on TEFL & applied linguistics</i>. Crane.</p> <p>⑦ Kobayashi, I. (2008). " They speak ' incorrect' English" : Understanding Taiwanese Learners' Views on L2 Varieties of English. <i>Philippine Journal of Linguistics</i>, 39, 81-98.</p>
所属学会	International Association of World Englishes (IAWE) The Japanese Association for Asian Englishes (JAF AE) The Japan Association for Language Teaching (JALT), Global Englishes SIG The Japan Association of College English Teachers (JACET), ELFSIG, 言語政策研究会



氏名
職名
連絡方法
学歴

スズキ トシヒロ

鈴木 俊弘 SUZUKI Toshihiro

准教授（2023年4月）

E-mail : toshisuz@nuis.ac.jp

2000年 一橋大学大学院 言語社会研究科 言語社会学専攻 修士課程 修了

2014年 一橋大学大学院 社会学研究科 総合社会科学専攻 歴史社会研究分野
修士課程 修了

2021年 一橋大学大学院 社会学研究科 総合社会科学専攻 歴史社会研究分野
博士後期課程 単位取得満期退学

学 位

修士（学術） 一橋大学 2000年3月

修士（社会学） 一橋大学 2014年3月

職 歴

2015年～ 2016年 武蔵大学 人文学部講師（非常勤）

2016年～ 2023年 桜美林大学 LA学群講師（非常勤）

2017年～ 2023年 駿河台大学 現代文化学部講師（非常勤）

2018年～ 現在 文教大学 国際学部講師（非常勤）

2020年～ 2023年 立教大学 兼任講師

2021年～ 2023年 フェリス女学院大学 英米文学部講師（非常勤）

2022年～ 2023年 一橋大学 社会学部／社会学研究科講師（非常勤）

受 賞 歴

第7回日本移民学会冬季研究大会 次世代リレートーク 特別賞（2022年12月10日）

第64回日本西洋史学会大会 ポスターセッション 優秀賞（2014年6月1日）

研 究 分 野

アメリカ移民史研究（記念・顕彰行為と歴史記述）、人種論研究、文化表象研究
19世紀から20世紀前半のアメリカ合衆国社会に流布した人種論を読み解く研究
を行っています。現在の関心は、アメリカ入植史の表象方法と20世紀的な人種
言説の相関性を論じることです。

主 要 業 績

論文

① 鈴木俊弘（2024）．「南北戦争を再上演する試み——リエナクトメント映画と
としての『国民の創生』と「戦争映画」の視覚文法——」『新潟国際情報大
学国際学部紀要』（9），1-22.

② 鈴木俊弘（2024）．「核エネルギーを社会に受け入れることの諸相——フィン
ランド共和国初の商用原子炉「ロヴィーサ1号機」建設をめぐる社会文化
文脈——」『新潟国際情報大学国際学部紀要』（9），53-78.

③ 鈴木俊弘（2013）．「ユハン・エナンデルの歴史記述と『スウェーデン的アメ
リカニズム』——〈アメリカ人たること〉のためにスウェーデン語を使用し
た移民集団の企図について——」『言語社会』（7），258-276.

④ 鈴木俊弘（2010）．「トリミングする手の意志——1938 年デラウェア河流域入植
三百周年記念切手群とその政治性をめぐる考察——」『言語社会』（4），350-373.

⑤ 鈴木俊弘（2009）．「〈国民史〉を適切に〈他者〉へ登記すること——フィン
ランド共和国が『デラウェア河流域三百周年記念祭』へ招待される過程
の意味について——」『言語社会』（3），279-302.

⑥ 鈴木俊弘（2008）．「歴史書を埋める国民のメンタリティ——『デラウェア
河流域三百周年記念祭』を読み解くための史的背景について——」『言語
社会』（2），220-240.

翻訳

① エイミー・カプラン著、増田久美子、鈴木俊弘訳、『帝国という無秩序——
アメリカ文化の形成——』（青土社、2009）．

② スラヴォイ・ジジエク著、鈴木俊弘、増田久美子訳、『厄介なる主体2——
政治的存在論の空虚な中心——』（青土社、2007）．

③ スラヴォイ・ジジエク著、鈴木俊弘、増田久美子訳、『厄介なる主体1——
政治的存在論の空虚な中心——』（青土社、2005）

④ ベネディクト・アンダーソン著、糟谷啓介、高地薫、イ・ヨンスク、鈴木俊
弘ほか訳、『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』（作品社、
2005）．

所 属 学 会

2012年～ 現在 日本アメリカ史学会 会員

2014年～ 現在 アメリカ学会 会員

2015年～ 現在 歴史学研究会 会員



氏名
職名
連絡方法
学歴

スズキ ユウヤ
鈴木 佑也 SUZUKI Yuya

准教授（2023年4月）

E-mail: syuya@nuis.ac.jp

2003年3月 上智大学外国語学部ロシア語学科卒業

2006年3月 東京外国語大学大学院地域文化研究課博士前期課程修了

2014年9月 ロシア国立芸術学研究所Ph. Dコース（準博士課程）修了

2014年9月 東京外国語大学大学院地域文化研究課博士後期課程満期退学

学位

Ph. D（芸術学、ロシア国立芸術学研究所、2015年4月）

職歴

博士（学術、東京外国語大学、2016年12月）

2014年10月～ 東京外国語大学非常勤講師

2014年10月～ 2019年3月 横浜国立大学非常勤講師

2015年 4月～ 2020年3月 東京理科大学非常勤講師

2016年 4月～ 2019年3月 日本学術振興会特別研究員（PD・横浜国立大学）

2017年 9月～ 2018年3月 早稲田大学非常勤講師

2018年 4月～ 2020年3月 上智大学非常勤講師

2018年 4月～ 2020年3月 東京工業大学非常勤講師

受賞歴

2023年度ロシア文学会賞受賞（『ソヴィエト宮殿 建設計画の誕生から頓挫まで』）

研究分野

ロシア・ソ連建築史/美術史、表象文化論

主に1930-60年代のソ連における大型建築プロジェクトや都市計画、対外建築交流、政治と建築の相関性について研究している。

主要業績

著書

① 鈴木佑也（2021）.『ソヴィエト宮殿 建設計画の誕生から頓挫まで』. 水声社

② 「横浜国立大学都市科学部編（2021）」『都市科学事典』 春風社（共著）

③ 沼野充義他編（2019）.『ロシア文化辞典』 丸善出版会（共著）

論文（直近5年分のみ）

① 鈴木佑也（2023）.「『一体何が今日の家庭をこれほどに変え、魅力あるものにしているのか』—— 1950年代末にソ連で建設され始めた集合住宅に関する一考察」、『スラブ文化研究』 20、29-53.

② 鈴木佑也（2023）.「1950年代半ばのソ連建築におけるニキータ・フルシチョフの言説を巡って」、『新潟国際情報大学国際学部紀要』 8、47-69.

③ 鈴木佑也（2019）.「ソ連建築界における新たな段階：第5回世界建築家連合（UIA）国際会議モスクワ開催に関する考察」『スラブ文化研究』 16、22-43.

④ 鈴木佑也（2017）.「機能的都市と社会主義都市—近代主義建築と全体主義期ソヴィエト建築の相互関係の導入として」『アヴァンギャルドの知覚』 56-76.

⑤ 鈴木佑也（2017）. 1930年代から1950年代のソヴィエト絵画作品に見られる建築プロジェクト『ソヴィエト宮殿』とI.スターリンの関係性。『声をさがしつつ——和田忠彦先生退任記念論文集』, 259-276.

その他

① ビタリー・テルレツキー、カティア『サバキスタン1』（翻訳:鈴木佑也）（2023年）、トゥーバージンズ社、全164頁

② ビタリー・テルレツキー、カティア『サバキスタン2』（翻訳:鈴木佑也）（2023年）、トゥーバージンズ社、全144頁

③ ビタリー・テルレツキー、カティア『サバキスタン3』（翻訳:鈴木佑也）（2023年）、トゥーバージンズ社、全144頁

④ 鈴木佑也（2020）.「地震と社会主義リアリズム-ロシア／ソ連における建築と表象文化（2）」『不動産経済FAX-LINE』 1264、5-6.

⑤ 鈴木佑也（2019）.「自然災害と青銅の騎士-ロシア／ソ連における建築と表象文化（1）」『不動産経済FAX-LINE』 1250、3-5.

⑥ 鈴木佑也（2019）.「現代日本写真が伝える眼差しの方法——「記憶と光 日本の写真1950-2000 パリ・ヨーロッパ写真館所蔵 大日本印刷寄贈コレクションより」モスクワ展」『artscape』 平成30年6月5日号（http://artscape.jp/report/topics/10146545_4278.html）

所属学会

日本ロシア文学会



氏職
連学
絡方
歴

学職
位歴

受賞歴
研究分野
主要業績

所属学会
その他

セト ヒロユキ

瀬戸 裕之 SETO Hiroyuki
准教授 (2016年9月)

E-mail: setohiro@nuis.ac.jp

1994年 3月 新潟大学法学部 卒業

1996年 3月 名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了

1998年10月～2001年8月 ラオス国立大学法律政治学部 (留学)

2005年 3月 名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士後期課程満期退学

博士 (学術) (名古屋大学、2009年3月)

2004年 4月～2010年 3月 愛知淑徳大学非常勤講師

2005年10月～2009年 3月 愛知県立大学非常勤講師

2005年 4月～2010年 3月 岐阜市立女子短期大学非常勤講師

2006年 4月～2010年 9月 名古屋外国語大学非常勤講師

2008年 4月～2008年 9月 名古屋大学非常勤講師

2009年 4月～2010年 3月 名城大学非常勤講師

2010年 9月～2012年 3月 京都大学東南アジア研究所機関研究員

2011年 4月～2013年 8月 立命館大学非常勤講師

2012年 4月～2013年 8月 京都大学東南アジア研究所研究員

2012年 4月～2013年 8月 京都大学非常勤講師

2012年 4月～2013年 8月 愛知県立大学非常勤講師

2013年 4月～2013年 8月 龍谷大学非常勤講師

2013年 8月～2015年 9月 名古屋大学大学院法学研究科特任講師 (ラオス・日本法教育研究センター勤務; 在ラオス)

2015年10月～2016年 8月 名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院・特任准教授

(法学; ラオスサテライトキャンパス事務所勤務)、ラオス・日本法教育研究センター講師 (法研究) を兼任

2016年 4月～2016年 8月 名古屋大学ラオス海外事務所長を兼任

ジェトロ・アジア経済研究所第37回「発展途上国研究奨励賞」受賞 (2016年7月)

ラオス人民民主共和国「友好勲章」受章 (2017年8月)

東南アジア地域研究 (ラオス研究)、比較政治学、国際関係論

著書

① 瀬戸裕之 (2022). 「ラオス人民民主共和国 ― 党検査機関と汚職取締機関

による「三位一体」体制の形成とその課題 ―」外山文子・小山田英治 (編)

『東南アジアにおける汚職取締の政治学』 (pp. 302-334). 晃洋書房.

② 瀬戸裕之 (2021). 「ラオス人民民主共和国」鮎京正訓・四本健二・浅野宜

之 (編) 『新版 アジア憲法集』 (pp. 459-508). 明石書店.

③ 瀬戸裕之・河野泰之 (編) (2020). 『東南アジア大陸部の戦争と地域住民

の生存戦略―避難民・女性・少数民族・投降者からの視点』明石書店.

④ 瀬戸裕之 (2015). 「政治」ラオス文化研究所 (編) 『ラオス概説 (第2版)』 (pp.

93-124). めこん.

⑤ 瀬戸裕之 (2015). 『現代ラオスの中央地方関係―県知事制を通じたラオス

人民革命党の地方支配―』京都大学学術出版会.

⑥ 瀬戸裕之 (2014). 「ラオスの中央集権化と地方分権化に関する一考察―ヴィ

エンチャン県の開発と治安のバランス―」鈴木基義 (編著) 『ラオスの開発

課題』 (pp. 331-366). JICAラオス事務所.

⑦ 瀬戸裕之 (2010). 「ラオス人民革命党―党の発展と改革路線の継続―」菊

池陽子・鈴木玲子・阿部健一 (編) 『ラオスを知るための60章』 (pp. 186-

192). 明石書店.

⑧ 瀬戸裕之 (2010). 「国家機構―党支配体制下の法治国家建設―」菊池陽子・

鈴木玲子・阿部健一 (編) 『ラオスを知るための60章』 (pp. 193-200) 明石書店.

⑨ 瀬戸裕之 (2009). 「ラオス」鮎京正訓 (編) 『アジア法ガイドブック』 (pp.

267-293). 名古屋大学出版会.

論文

① 瀬戸裕之 (2019). 「司法省元高官の視点からみるラオス現代史―フィ・ボンセー

ナー博士の経験から―」『新潟国際情報大学国際学部紀要』 (4), 21-42.

② 瀬戸裕之 (2019). 「2015年のラオス憲法改正に関する一考察―人権関連の

法規定を中心に―」『社会体制と法』 (16・17), 32-52.

③ 瀬戸裕之 (2016). 「1991年憲法制定前におけるラオス地方議会法制の変遷

―1988年地方人民議会選挙とその帰結を中心に―」『アジア法研究』 (9),

241-260.

④ 瀬戸裕之 (2010). 「ラオス人留学生の協力による法整備支援ワークショップ」

『ICD NEWS (法務省法務総合研究所国際協力部報)』 (44), 35-53.

⑤ 瀬戸裕之 (2008). 「ラオスの中央地方関係における県知事および県党委員

会の権限に関する一考察―ヴィエンチャン県工業局の事業形成過程を中心

に―」『東南アジア研究』 46 (1), 62-100.

⑥ 瀬戸裕之 (2005). 「ラオス1991年憲法体制における県党・行政制度に関す

る一考察―ヴィエンチャン県を事例に―」『国際開発研究フォーラム』 (28),

181-199.

東南アジア学会、アジア政経学会、日本国際政治学会、国際開発学会、比較法

学会、アジア法学会、「社会体制と法」研究会

JICA「ラオス国法の支配発展促進プロジェクト」アドバイザリーグループメンバー



氏名
職名
連絡方法
学歴

ナカムラ タカシ

中村 貴 NAKAMURA Takashi

准教授（2022年9月）

E-mail: tnakamu@nuis.ac.jp

2002年 西南学院大学文学部国際文化学科卒業

2004年 西南学院大学大学院文学研究科修士課程修了

2007年 西南学院大学大学院国際文化研究科博士課程単位取得満期退学

2009年～2015年 華東師範大学中国語文学系博士課程留学（中国）

2015年 華東師範大学中国語文学系博士課程修了

学

位

博士（国際文化、西南学院大学、2013年3月）

博士（文学、華東師範大学、2015年6月）

職

歴

2016年4月～2022年 9月 西南学院大学国際文化学部非常勤講師

2015年7月～2017年12月 華東師範大学社会発展学院民俗学研究所博士研究員

2016年4月～2020年 3月 西南学院大学国際文化研究科博士研究員

2018年3月～2022年 9月 華東師範大学社会発展学院民俗学研究所専任講師

2019年4月～現在 関西学院大学世界民俗学研究センター客員研究員

受賞歴

研究分野

第二次張学良口述歴史国際学術研究会優秀論文賞（二等賞、2017年8月）

中国古代史、現代民俗学、現在は現代上海在住日本人の生活史について研究し、彼らの生活史を日中関係史の文脈に位置づけ、民間人の生活史や民間交流から日中関係を捉えようと試みている。

主要業績

著書

① 中村貴（2020）『太湖流域春申君治水伝説研究』中国社会科学出版社。

② 中村貴（2019）『日中両国の“はざま”に生きる—現代上海在住日本人とその境界性について』国立歴史民俗博物館編『歴博』第216号（pp.12-15）

③ 中村貴（2017）『“内なる他者”としての上海在住日本人と彼らの日常的実践』松尾恒一編『アジア遊学』NO.215（pp.212-216）. 勉誠出版。

④ 中村貴（2014）『「強死」考—「強死」と楚人・楚の巫風との関係を中心として—』大野圭介主編『『楚辞』と楚文化の総合的研究』（pp.21-37）. 汲古書院。

⑤ 中村貴（2011年）『楚人と『楚辞』中の「強死」研究』中国屈原学会編『中国楚辞学』（pp.333-343）. 学苑出版社。

論文

① 中村貴（2023）『現代上海における日本人社会の形成と発展（1）—1970年代末から1990年代まで—』『新潟国際情報大学国際学部紀要』（8）,（pp.1-9）。

② 中村貴（2022）『現代中国の民俗学：テキストの中の“民俗”から生活の中の“民俗”へ』『関西学院大学社会学部紀要』（138）,（pp.135-159）。

③ 中村貴（2021）『通往“新都市民俗学”之路—從日本都市民俗学及其問題談起』『華東師範大学（哲学社会科学版）』（1）,（pp.102-106）。

④ 中村貴（2020）『面向“人”及其日常生活的学問—現代日本民俗学的新動向』『文化遺産』（3）,（pp.99-106）。

⑤ 中村貴（2019）『混合型群衆の可能性—以当代在滬日本人的位置性為中心』『華僑大学学報（哲学社会科学版）』（4）,（pp.139-150）。

⑥ 中村貴（2018）『口述、口述史学与口述史方法—從重現歷史到探究普通人的“心意”』『史林』口述史増刊号,（pp.186-190）。

⑦ 中村貴（2017）『被建構的「恐懼記憶」—来自在滬日本人的日常生活體驗分析』『華東師範大学（哲学社会科学版）』（5）,（pp.62-69）。

⑧ 中村貴（2017）『太湖流域春申君伝説研究—以上海為例』『荊楚学刊』（4）,（pp.5-11）。

⑨ 中村貴（2017）『四君子から治水人物へ—太湖流域における春申君伝説の形成と伝承について—』『九州中国学会報』（55）,（pp.1-15）。

⑩ 中村貴（2017）『探究普通人日常生活及其背後的心意—兼論現代民俗学研究中口述史方法的目的与意義』『鄭州大学学報（哲学社会科学版）』（1）,（pp.123-127）。

⑪ 中村貴（2016）『追尋主觀性事實：口述史在現代民俗学應用的方法与思考』『文化遺産』（6）,（pp.89-95）。

所属学会

その他

日本中国学会、九州中国学会、日本民俗学会、中国民俗学会

科研費（中国）「現代上海日僑生活史研究」（中国博士后科学基金、2015年7月～2017年12月）

「口述史視野下的現代上海在滬日本人生活史研究（1978年～2020年）」（中国中央高校項目、2018年3月～2022年9月）

「上海都市語境中的“日式”生活方式研究—以居酒屋為个案」（華東師範大学、青年預研究、2021年7月～2022年9月）



氏名
職 名
連 姓
絡 法
学 歴

フジモト ナオキ

藤本 直生 Naoki Fujimoto-Adamson

准教授 (2014年9月)

E-mail : fujimoto@nuis.ac.jp

1991年3月 日本大学文理学部文学専攻 (英文学) (通信教育課程) 卒業

1997年3月 玉川大学文学部教育学科小学校コース (通信教育課程) 修了

1999年9月 University of Essex, UK, Department of Language and Linguistics, MA in English Language Teaching 修了

2011年1月 University of Leicester, UK, School of Education, Doctor of Education (Ed. D.) in Applied Linguistics and TESOL 単位取得満期退学

学 位
職 歴

2000年4月 M.A. in English Language Teaching (ELT)

2012年7月 Master of Education (M.Ed.) in Applied Linguistics & TESOL

1991年 4月～1998年3月 長野県公立中学校英語教員

2001年10月～2002年3月 University of Leicester, UK, Language Centre 日本語講師

2002年 4月～2009年3月 諏訪東京理科大学共通教育センター 非常勤講師

2002年 4月～2009年3月 信州豊南短期大学言語コミュニケーション学科 非常勤講師

2009年 4月～2013年3月 新潟県立大学セルフ・アクセス・センター 学習指導員

2014年 4月～2014年9月 新潟県立大学国際地域学部 非常勤講師

研 究 分 野
主 要 業 績

応用言語学、社会言語学、英語教育、English Medium Instruction (EMI)、チームティーチング
著書

- ① Fujimoto-Adamson, N. (2023). From JTE to team-teaching researcher: Autoethnographic reflections. In T. Hiratsuka. (Ed.). *Team Teachers in Japan: Beliefs, Identities, and Emotions*. (pp.32-43) Abingdon, UK: Routledge.
- ② Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2021). Translanguaging in EMI in the Japanese tertiary context: Pedagogical challenges and opportunities. In B. A. Paulsrud, Z. Tian, & J. Toth, (Eds.), *English Medium Instruction and Translanguaging*. (pp. 15-28) Bristol, UK: Multilingual Matters.
- ③ Fujimoto-Adamson, N. (2020). *Globalisation and Its Effects on Team-Teaching*. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing.
- ④ Fujimoto-Adamson, N., & Adamson, J. L. (2018). From EFL to EMI: Hybrid practices in English as a medium of instruction in Japanese tertiary contexts. In Y. Kirkgoz, & K. Dikilias, (Eds.), *Key Issues in English for Specific Purposes in Higher Education*. (pp. 201-221) Cham, Switzerland: Springer.

論文 (2010年以後)

- ① Fujimoto-Adamson, N., & Adamson, J. L. (2024). Shuttling between language and content teaching: Exploring opportunities and challenges through collaborative autoethnography. *International Journal of English for Academic Purposes: Research and Practice*. 4 (2), 113-127.
- ② Fujimoto-Adamson, N., Adamson, J. L., & Niendorf, A. M. (2024). Exploring the supervisor's writing experiences and their effects on undergraduate thesis supervisory practices: A comparison of Japanese and Swedish contexts. *Research in Comparative and International Education*.
- ③ Adamson, J. L., Coulson, D. & Fujimoto-Adamson, N. (2019). Supervisory practices in English-medium undergraduate and postgraduate applied linguistics thesis writing: Insights from Japan-based tutors. *Asian Journal of Applied Linguistics*, 6 (1), 14-27.
- ④ Adamson, J. L., Stewart, A., Smith, C., Lander, B., Fujimoto-Adamson, N., Martinez, J., & Masuda, M. (2019). Exploring the publication practices of Japan-based EFL scholars through collaborative autoethnography. *The Journal of English Scholars Beyond Borders (ESBB)*, 5 (1), 3-31.
- ⑤ Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2016). Sustaining review quality: Induction mentoring, and community. *The Journal of ESBB*, 2 (1), 29-57.
- ⑥ Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2015). 'I was in their shoes': Shifting perceptions of editorial roles and responsibilities. *The Journal of ESBB*, 1 (1), 109-142.
- ⑦ Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2012). Translanguaging in self-access language advising: informing language policy. *Studies in Self Access learning (SiSAL)*, 3 (1), 59-73.
- ⑧ Adamson, J. L., Brown, H., & Fujimoto-Adamson, N. (2012). Revealing shifts and diversity in understanding of self access language of learning. *Journal of University Teaching and Learning Practice*, 9 (1), 1-16.
- ⑨ Adamson, J. L., Brown, H., & Fujimoto-Adamson, N. (2011). Archiving self access: Methodological considerations. *Asian EFL Journal*, 13 (2), 11-33.
- ⑩ Adamson, J. L., Brown, H., & Fujimoto-Adamson, N. (2010). Co-construction and understanding of self-access through conversational narrative. *SiSAL*, 1 (3), 173-188.
- ⑪ Fujimoto-Adamson, N. (2010). Voices from team-teaching classrooms: A case study in junior high school in Japan. *Business Communication Quarterly*, 73 (2), 200-205.

所 属 学 会

English Scholars Beyond Borders (ESBB)

Japan Association for Language Teaching (JALT)

JALT Collage and University Educators (CUE) Special Interest Group



氏名	リューデ アンナ LYUDE Anna
職名	准教授 (2023年4月)
連絡方法	E-mail : lyude@nuis.ac.jp
学歴	1995年 クバン国立大学所属経済法律自然科学学院 東洋学部地域学科卒業 2005年 新潟大学大学院経済学研究科修士課程経営学専攻修了 2011年 新潟大学大学院現代社会文化研究科国際社会形成論専攻博士後期課程単位取得満期退学
学位	修士 (経営学) 新潟大学、2005年3月
職歴	2017年4月～2022年3月 新潟大学自然科学系 (農学部)、特任助教 2022年4月～2023年3月 新潟大学教育・学生支援機構、非常勤講師
研究分野	農業分野における日露経済関係、学術交流やそれに向けた両国産学官連携取り組みや人材育成；国際共同研究
主要業績	<p>論文・プロシーディング</p> <ol style="list-style-type: none"> ① Boiarskii, B., Lyude, A., Boiarskaia, A., Ohtake, N., Hasegawa, H. (2024). Bibliometric analysis of the Japan-Russia scientific cooperation networks using R bibliometrix. <i>Journal of Infrastructure, Policy and Development</i>. 8(8): 6155. ② Boiarskaia, A., Hasegawa, H., Boiarskii, B., Lyude, A., Ohtake, N. (2024). A comprehensive analysis of soybean breeding in Russia: Insights into soybean varietal diversity. <i>Journal of Infrastructure, Policy and Development</i>. 8(8): 6448. ③ Sandakova, N., Hasegawa, H., Lyude, A., Sandakov, T., & Kolesnikova, E. (2022). Agricultural Machinery Cluster Formation Model under Import Substitution in Russia. <i>AMA</i>, 53 (1), 7-15. ④ Sandakov, T., Hasegawa, H., Radnaev, D., Sandakova, N., & Lyude, A. (2022). Effects of tillage systems on grain production in the Republic of Buryatia, Russia. <i>AMA</i>, 53 (1), 35-41. ⑤ Vaitekhovich, I., Lyude, A., Boiarskaia, A., & Hasegawa, H. (2022). The possibility of introduction and cultivation of vegetable soybean in the Amur Region. <i>IOP Conference Series: Earth and Environmental Science</i>, 1045 (1), 012016. 1-7. ⑥ Lyude, A., Boiarskii, B., & Hasegawa, H. (2021). International joint research: Current situation and challenges for the Japan-Russia collaboration in the field of agriculture. <i>IOP Conference Series: Earth and Environmental Science</i>, 677 (5), 1-7. ⑦ Lyude, A., Boiarskii, B., Emelianov, A., Fisenko, P., Matsishina, N., & Hasegawa, H. (2021). Climate change impact on extreme flood occurrence and flood-related damage to the Primorye region agriculture. <i>IOP Conference Series: Earth and Environmental Science</i>, 677 (5), 1-10. ⑧ Dorzhiev, M., Hasegawa, H., Lyude, A., Dorzhieva, A., & Kolesnikova, E. (2021). Stages of formation and development of greenhouse vegetable cultivation in the USSR and Russian Federation. <i>AMA</i>, 52 (2), 7-14. ⑨ Maksimenko, A., Lyude, A. & Nishiumi, T. (2020). Texture-modified foods for the elderly and people with dysphagia: Insights from Japan on the current status of regulations and opportunities of the high pressure technology. <i>IOP Conference Series: Earth and Environmental Science</i>, 548 (2), 1-9.
所属学会 その他	ユーラシア研究所, The International Academic Forum (IAFOR) 科研費基盤研究 (C)「農学分野における国際共同研究の課題と外国人留学生が果たす役割の実証的研究」, 研究代表者 学術貢献活動：日露植物保護科学ミニシンポジウム「Russia-Japan Joint Mini-symposium on Plant Protection 2022」(HaRP事業経費支援事業)



氏名
連絡方法
学歴

サトウ ヤスコ

佐藤 泰子 SATO Yasuko

講師 (2019年4月)

E-mail : ysato@nuis.ac.jp

1990年 津田塾大学学芸学部英文学科英文文学士号

1993年 CENTRAL WASHINGTON UNIVERSITY Graduate Study of Master of Arts – English: Teaching English of Second Language / Teaching English of Foreign Language

学位
学歴

Master of Arts (文学修士号取得)

1992年 Central Washington University 大学付属 ESL研究助手

1993年～ 1995年 東京家政大学国際交流センター職員

1995年～ 1999年 同短期大学部国際コミュニケーション科助手

2001年～ 2008年 同上 家政学部非常勤講師

2008年～ 2014年 同上 大学人文学部・家政学部非常勤講師

2009年～ 2013年 東京国際大学言語コミュニケーション学部非常勤講師

2012年～ 2014年 新潟国際情報大学情報文化学科非常勤講師

受賞歴

2015年3月 実用英語技能検定 (英検) 「奨励賞」 受賞

2016年3月 実用英語技能検定 (英検) 「努力賞」 受賞

2017年-2018年3月 実用英語技能検定 (英検) 「文部科学大臣賞 (大学部門)」 受賞

2021年11月 第25回日本国際観光学会全国大会学生動画コンテスト「アカデミックアワード」 受賞

2022年12月 第26回日本国際観光学会全国大会学生動画コンテスト「アトラクティブアワード」 受賞

2024年12月 第28回日本国際観光学会全国大会学生動画コンテスト「アトラクティブアワード」 受賞

2019-現在 実用英語技能検定 (英検) 「奨励賞」 連続受賞

2025年4月～ 2026年3月 2025年度古泉財団研究費助成金「新潟の無形文化財としての酒造りと食文化を活用したインバウンド観光の可能性と展望」 研究

研究分野
主要業績

英語教育、教育工学、観光学

著書

Jann Huizenga著、佐藤泰子他編訳(2012).『Introduction to Essay Writing – A Step-By-Step Course from Paragraph to Essayエッセイライティング入門』松柏社 2012年 (第13版)

論文

① Fujita, M. and Sato, Y. (2022). The Current Condition and Issues of Medical Tourism in Thailand : A Study on the Marketing Management Process. NUIS Journal of International Studies, No. 7, 41-52.

② Sato, Y. (2021). The Effectiveness of Peer-Response Groupwork in CLIL and EFL Classroom Settings: A Collaborative Work in Writing Courses in Japan. NUIS Journal of International Studies, No. 6, 55-68.

③ Sato, Y. (2020). Validation of the EIKEN Tests in Japanese University's English Foundation Course-A Case Study on Teaching EFL Students at NUIS. NUIS Journal of International Studies, No. 5, 27-37.

④ Sato, Y. (2019). A Comparative Study of MOOCs among Higher Education Institutions in Asian Countries: The Instructor's Perspectives. NUIS Journal of International Studies, No. 4, 123-130.

⑤ Sato, Y. (2018). The Case Study of MOOCs for College Students in Japan. KTESOL PROCEEDINGS, 201-209.

⑥ Sato, Y. (2015). An Analysis of Effectiveness of TOEIC Practice with Computer Adaptive Testing (u-CAT) as a Web-Based CALL System. NUIS Journal of International Studies, 91-96

所属学会

・ Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc. (TESOL)

・ The Japan Association for Language Education and Technology (LET) 外国語教育メディア学会

・ Japan Association for Educational Media Study(JAEMS)日本教育メディア学会

・ Japan Society for Educational Technology日本教育工学会 (JSET)

その他

・ 2014年

ー新潟市シティプロモーション認定事業「留学生とともに発信! 食と郷土文化を学ぶ岩室温泉ツアー企画事業」ー「IWAMURO」を英語で、一緒にLet's おもてなし!新潟初バイリンガルなまちあるきガイドへの道

・ 2018年11月～ 2019年2月

本学中央キャンパス文化講演会「新潟らしい『おもてなし』とは?」ー街の魅力再発見・もてなす心、極意を達人に学ぶー(「みなとまち新潟」市民団体等活動助成事業) 連続講演会企画&講師

・ 2016年～ 2020年

新潟県シニアカレッジ「まちかどふれ愛英会話コース」講師

・ 2019年～現在

新潟市国際観光課大型クルーズ船観光客への学生通訳ボランティア派遣事業

・ 2021年～現在

新潟県観光協会と共同研究 NIIGATA NUIS PROJECTを立ち上げ、所属学生10名が県協会のInstagramを運営、投稿担当

・ 2022年～現在

「新潟の隠れた宝・魅力を「英語」を通して学ぶ「新潟国際情報大学オープンカレッジ」

・ 2022年7月～現在

「新潟国際情報大学 (NUIS TOURISM PROJECT) と株式会社フジドリームエアラインズとの 包括連携に関する協定締結」及び「新潟国際情報大学 (NUIS TOURISM PROJECT) と新潟県観光協会との包括連携に関する協定締結」

・ 2024年3月～現在

本研究室と弥彦村 (弥彦教育委員会) 包括連携協定



氏名
職名
連絡方法
学歴

ジュリアス マルティネス

Julius C. Martinez

契約准教授 (CEP) (2021年4月)

E-mail : jcm@nuis.ac.jp

2003 University of the East, Philippines

Bachelor of Secondary Education Major in English

2009 Ateneo de Manila University, Philippines

MA in English Language and Literature Teaching

2019 University of the Philippines-Diliman

PhD in Language Education

学位
学歴

PhD in Language Education

2015-2016 Faculty, Saint John's Catholic School, Indonesia

2013-2015 Lecturer, University of the Philippines - Diliman

2013-2015 Instructor, Ateneo de Manila University, Philippines

研究分野
主要業績

Multi/translingualism; Sociolinguistics; Language education

著書

- ① Martinez, J., & Martin, I. P. (2025). Philippine English in Migration and Mobility: Beyond Internal Differentiation. In S. Rüdiger, T. Neumaier, S. Leuckert, & S. Buschfeld (Eds.), *World Englishes in the 21st Century: New Perspectives and Challenges to the Dynamic Model* (pp. 265–284). Edinburgh University Press.
- ② Martinez, J. (2024). "Half-native" and cheap English teachers: Probing unequal Englishes through multimodal critical discourse analysis. In R. Tupas (Ed.), *Investigating Unequal Englishes: Understanding, Researching and Analysing Inequalities of the Englishes of the World* (pp. 105-119). Routledge.
- ③ Martinez, J., & Martin, I. P. (2024). English language education and educational policy in the Philippines. In A. J. Moody (Ed.), *The Oxford Handbook of Southeast Asian Englishes* (pp. 526-540). Oxford University Press.
- ④ Hashim, A., Chik, A., Martinez, J.C., McLellan, J., Moody, A. J., & Ooi, V. B. Y. (2024). Variety shifting in Southeast Asia's Outer Circle. In A. J. Moody (Ed.), *The Oxford Handbook of Southeast Asian Englishes* (pp. 97-119). Oxford University Press.

論文

- ① Martinez, J. (2024). Understanding inequalities of Philippine English in job interviews. *World Englishes*, 43 (4), 607-623. <https://doi.org/10.1111/weng.12662>
- ② Martinez, J. (2021). A 'new' hierarchy of English teachers: the 'half-native' English teacher as a neoliberal, racialized and gendered subject. *Asian Englishes*. <https://doi.org/10.1080/13488678.2020.1870787>
- ③ Martinez, J. (2021). Recovering translingualism in precolonial Philippines. *International Journal of Multilingualism*. <https://doi.org/10.1080/14790718.2021.1932909>
- ④ Martinez, J. (2019). Semiotic resources in everyday communication. *NUIS Journal of International Studies*, 4, 73-90.
- ⑤ Adamson, J., Steward, A., Smith, C., Lander, B., Fujimoto-Adamson, N., Martinez, J. and Masuda, M. (2019). Exploring the publication practices of Japan-based EFL scholars through collaborative autoethnography. *English Scholarship Beyond Borders*, 5 (1), 3-31.
- ⑥ Martinez, J. (2018). Preparing teachers to teach English as an international language. *Asian Englishes*, 20 (2), 186-189. <https://doi.org/10.1080/13488678.2017.1345556>
- ⑦ Martinez, J. (2017). English language education in Japan, Indonesia and the Philippines: A Survey of Trends, Issues and Challenges. *NUIS Journal of International Studies*, 2, 83-93

所属学会

The Japanese Association for Asian Englishes; Linguistic Society of the Philippines



氏 名
職 名
連絡方法
学 歴

学 位
職 歴

シンシア スミス

Cynthia Smith

契約講師 (CEP) (2021年5月)

E-mail : smith@nuis.ac.jp

M.A. TESOL Anaheim University (USA), 2012

B.A. Latin American Studies, Smith College (USA), 1994

M.A. in TESOL

GLT Engage, Portland, Instructor (2020-2021) ; 新潟国際情報大学, CEP Instructor (2016-2019) ; AIR College, Instructor, 2015-2016; Niigata City Board of Education, Assistant Language Instructor, 2013-2014; Instructor, Portland State University (2011-2013) ; Niigata City Board of Education, Assistant Language Instructor (2004-2011) ; GEOS Language Systems, Instructor and Area Liaison to Head Office (1997-2004)

受賞歴
研究分野
主要業績

Award for Academic Excellence, Anaheim University, 2012

Diversity, Identity, Bilingualism

- ① Smith, C. (2023,7.16). Promoting gender-neutral language in the classroom (Research presentation). JALT Matsuyama Chapter (後援: 松山市,松山教育委員会).
- ② Smith, C. & Thukral, L. (2022, November 12). Gender neutral pronouns (Research presentation). GALE Forum, JALT International Conference, Nagano, Japan.
- ③ Smith, C. & Thukral, L. (2022, July 9). Giving the L2 learner what they want and need (Research presentation). JALT PanSIG Conference, Fukuoka, Japan.
- ④ Smith, C. (2022). Japanese university students' exposure to and attitudes toward singular they. NUIS Journal of International Studies (7), 81-90.
- ⑤ Smith, C. (2021, August 21). The natural use and teaching of singular they (Research presentation). North East Asia Regional (NEAR) Language Education Conference, Niigata, Japan.
- ⑥ Smith, C. (2020). Lesbian, mother, foreigner, and educator: Challenges of a multifaceted identity in Japan. In D. H. Nagatomo, K. A. Brown, & M. L. Cook (Eds.), Foreign female English teachers in Japanese higher education: Narratives from our quarter (pp. 193-205). Candlin & Mynard.
- ⑦ Smith, C. & Thukral, L. (2020). Coping with homework: Two intercultural mothers' experiences with their children's schoolwork in Japan. In M. L. Cook & L. G. Kittaka (Eds.), Intercultural families and schooling in Japan: Experiences, issues, and challenges (pp. 94-117). Candlin & Mynard.
- ⑧ Adamson, J., Steward, A., Smith, C., Lander, B., Fujimoto-Adamson, N., Martinez, J., and Masuda, M. (2019). Exploring the publication practices of Japan-based EFL scholars through collaborative autoethnography. English Scholarship Beyond Borders 5 (1), 3-31.
- ⑨ Smith, C. (2018). Linguistics of Diversity. Bilingual Japan, 27 (2), 4-10. JALT Bilingualism SIG.
- ⑩ Smith, C. (2017). Creating LGBT-inclusive classrooms (Research presentation). North East Asia Regional (NEAR) Language Education Conference, Niigata, Japan.
- ⑪ Smith, C. (2016). The shy bilingual. Bilingual Japan, 25 (2), 16-19. JALT Bilingualism SIG.
- ⑫ Smith, C. (2013, January). Correcting student errors (Presentation). 新潟県教育委員会主催、文部科学省共催年中学会発表.
- ⑬ Smith, C. (2010, January). Cultural issues facing female ALTs (Workshop). 新潟県教育委員会主催、文部科学省共催年中学会発表.

所属学会

・ Program Chair, Niigata Chapter, Japan Association of Language Teachers (JALT)
・ Member, Gender Awareness in Language Education, JALT Special Interest Group

経営情報学部 経営学科

内田 亨

木村 誠

佐々木 宏之

謝 凱雯

高井 透

藤瀬 武彦

藤田 晴啓

藤田 美幸

阿部 聡

小宮山 智志

佐々木 桐子

山下 功

今井 裕紀





氏名
職 名
連 名
学 方
法
歴

ウチダ トオル
内田 亨 UCHIDA Toru
教授 (2012年4月)
E-mail : uchida@nuis.ac.jp

学 位
職 歴

1985年3月 中央大学文学部文学科英米文学専攻卒業
1999年4月～1999年6月リヨン経営大学MBA交換留学
2000年3月 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際経営学 (MBA) 修了
2000年6月～2000年7月リヨン経営大学MBA交換留学
2000年9月～2001年6月ブリュッセル自由大学医学部交換留学
2004年9月～2005年6月リヨン第1大学医学部公衆衛生学講座交換留学
2007年3月 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学博士課程修了
博士 (学術、早稲田大学、2007年6月)
経営学修士 (MBA、早稲田大学、2000年3月)
1985年 4月～1990年7月 ライオン株式会社薬品事業部大阪本店営業課課員
1990年 8月～1993年7月 ライオン歯科材株式会社大阪本店販売促進課課員
1994年 3月～1995年1月 日本ロシユ株式会社試薬本部福岡支店営業課課員
1995年 2月～1998年7月 日本ロシユ株式会社試薬本部PCR (遺伝子診断) ビジネスユニット福岡支店Sales Planning
2004年10月～2005年3月 リヨン経営大学非常勤講師
2007年 4月～2012年3月 西武文理大学サービス経営学部准教授
2016年 4月～2016年7月 新潟大学大学院 技術経営研究科 非常勤講師
2006年度経営情報学会論文賞 (サードオーサー)
衰退産業における新たな成長戦略と持続的成長モデルの探究、組織におけるウェルビーイング

受 賞 歴
研 究 分 野
主 要 業 績

著書

- ① マニエー渡邊レミー、ベントン・キャロライン、内田亨、他 (2022). 「3. 強制的テレワークにより従業員が受けた影響」 秋山肇 (編) 『ポスト・コロナ学—パンデミックと社会の変化・連続性、そして未来』 (pp. 54-73). 明石書店
- ② 内田亨・オルシニ フィリップ・マニエー渡邊 馨子・マニエー渡邊 レミー・ベントン キャロライン (2021). 「第5章ワーク・ファミリー・コンフリクト」 長谷川信次 (編) 『コロナ下の世界における経済・社会を描く』 (pp. 103-120). 同文館
- ③ 内田亨・寺本義也 (2017). 「第7章サービス企業のビジネスモデル (1) 戦略実現の仕組み」 寺本義也・中西晶 (編著) 『サービス経営学入門：顧客価値共創の戦略経営』 (pp. 106-121). 同友館.
- ④ 内田亨・逆瀬川明宏・オルシニ フィリップ. (2011). 『医療ガバナンス—医療機関のガバナンス構築を目指して (医療経営士上級テキスト 5)』 日本医療企画.

論文・プロシーディング

- ① Orsini, P., Uchida, T., et al. (2024). Antecedents of subjective well-being at work -the case of French permanent employees. *Evidence-based HRM*,12(4),1040-1062.
- ② 内田亨 (2024). 「ローカルにおけるサーモン養殖の事業化: 岩手大槌サーモンの事例」『新潟国際情報大学国際学部紀要』 9,97-102.
- ③ R Magnier-Watanabe, C Benton, P Orsini, T Uchida. (2023). Predictors of Subjective Wellbeing at Work for Regular Employees in Japan. *International Journal of Wellbeing*,13(1),36-58
- ④ 高井透、内田亨 (2022). 「養殖事業のイノベーションと新規事業創造：陸上養殖事業の事例を中心に」『日本情報経営学会誌』 42 (2), 38-50.
- ⑤ Magnier-Watanabe, R., Benton, C., Orsini, P., Uchida, T., & Nagata, K. (2021). Antecedents of Subjective Well-Being at Work: The Case of Japanese Regular Employees. *In Academy of Management Proceedings* (Vol. 2021, No. 1, 10620). Briarcliff Manor, NY 10510: Academy of Management.
- ⑥ Magnier-Watanabe, R.,Uchida, T., Orsini, P., & Benton, C. (2020). Organizational virtuousness, subjective well-being, and job performance: Comparing employees in France and Japan. *Asia-Pacific Journal of Business Administration*, 12 (2), 115-138.
- ⑦ Magnier-Watanabe, R., Benton, C. F., Uchida, T., & Orsini, P. (2019). Designing Jobs to Make Employees Happy? Focus on Job Satisfaction First. *Social Science Japan Journal*, 22 (1), 85-107
- ⑧ Magnier-Watanabe, R., Uchida, T., Orsini, P., & Benton, C. F. (2018). The Mediating Role of Subjective Well-Being on Organizational Virtuousness and Job Performance : A Comparison between France and Japan. *Journal of Strategic Management Studies*, 10 (1), 5-18.
- ⑨ Magnier-Watanabe, R., Uchida, T., Orsini, P., & Benton, C. (2017). Organizational Virtuousness and Job Performance in Japan : Does Happiness Matter? *International Journal of Organizational Analysis*, 25 (4), 628-646.
- ⑩ 内田亨・山本靖 (2016). 「新潟県における『ブライト企業』の研究—シマト工業株式会社の事例より—」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 2, 61-70.
- ⑪ 内田亨 (2013). 「地域の中小企業とそれを取り巻くステークホルダーによる地域ブランド構築のメカニズム」『地域デザイン学会誌』 2, 133-152.
- ⑫ 内田亨・寺本義也 (2006). 「病院とコミュニティの共進化: 専門知と非専門知による価値創造」『オフィス・オートメーション学会誌』 27 (1), 55-63.

他38編

所 属 学 会
そ の 他

組織学会, 経営情報学会, 日本情報経営学会, 経営品質学会, 国際戦略経営研究学会
新経営革新研究会主宰, 日本経営品質学会理事 (2015年～), 新潟県経営品質賞委員会委員 (2018年～)



氏名	キムラ マコト 木村 誠 KIMURA Makoto
職名	教授 (2021年4月)
連絡方法	E-mail : mkimura@nuis.ac.jp
学歴	1983年4月～ 1987年3月 日本大学 理工学部 物理学科 1997年4月～ 1999年3月 産能大学 大学院 経営情報学研究科 2000年4月～ 2003年3月 東京大学 大学院工学系研究科博士課程 先端学際工学専攻
学位	経営情報学修士 産能大学 1999年3月
職歴	2007年4月～ 2018年3月 長野大学 企業情報学部 企業情報学科 准教授 2018年4月～ 2021年3月 公立大学法人 長野大学 企業情報学部 企業情報学科 教授
受賞歴	2021年4月～現在 新潟国際情報大学 経営情報学部経営学科 教授 2024年10月 日本システム・ダイナミクス学会 JSDカンファレンス2024 優秀発表賞 2022年 6月 日本システム・ダイナミクス学会 JSDカンファレンス2022 優秀発表賞 2018年10月 一般社団法人経営情報学会 2018年度論文賞 2018年10月 日本マーケティング学会 カンファレンス2018オーラルセッションベストペーパー賞
研究分野	経営情報学, デジタル市場, プラットフォーム・エコシステム, コンテンツ・ビジネス, システム・ダイナミックス
主要業績	① Kimura, M. (2024). Feature balance of scale and scope of data in AI platform firms. <i>The 2024 International System Dynamics Conference Proceedings</i> , System Dynamics Society, 1-28. ② 木村誠(2022).「データネットワーク効果の循環モデル -AI対応プラットフォームのデータ学習深化と境界拡大-」『経営情報学会誌』31 (2), 59-76. ③ Kimura, M. (2022). Customer segment transition through the customer loyalty program. <i>Asia Pacific Journal of Marketing and Logistics</i> , 34 (3), 611-626. ④ Kimura, M. (2020). Customer Journey Pathway Analysis from the Perspective of Customer Engagement: A System Dynamics Approach. 3rd Asia Pacific System Dynamics Conference in Brisbane, 1-10. ⑤ 木村誠 (2018). 「カスタマージャーニー (CJ) とカスタマーエンゲージメント (CE) の統合化モデルとシミュレーション」『日本マーケティング学会カンファレンス・プロシーディングス』7, 241-252. ⑥ 木村誠 (2017). 「クロスサイドネットワーク効果の萎縮効果の類型化 -コンシューマーゲーム産業の2サイド市場モデルとシミュレーション-」『経営情報学会誌』26 (3), 163-186. ⑦ Kimura, M. (2017). The growth stage of Japanese game apps market. <i>2nd Asia-Pacific Region System Dynamics Conference in Singapore</i> , 1-19.
所属学会	経営情報学会, 組織学会, 日本行動計量学会, 日本システム・ダイナミクス学会, Academy of Management, Strategic Management Society, System Dynamics Society
その他	日本システム・ダイナミクス学会 理事 (編集).



氏名	名	ササキ ヒロユキ
	姓	佐々木 宏之 SASAKI Hiroyuki
職名	名	教授 (2020年4月)
	姓	E-mail : sasakihi@nuis.ac.jp
連絡方法	学	1996年 東北大学文学部卒業
	歴	1998年 東北大学大学院文学研究科博士前期2年の課程修了
学位	学	2002年 東北大学大学院文学研究科博士後期3年の課程単位取得退学
	歴	博士 (文学、東北大学、2003年2月)
研究分野	学	2002年4月～2004年3月 日本学術振興会特別研究員 (PD)
	歴	2004年4月～2011年3月 新潟中央短期大学幼児教育科専任講師
主要業績	学	2011年4月～2018年3月 新潟中央短期大学幼児教育科准教授
	歴	2018年4月～2020年3月 新潟国際情報大学経営情報学部准教授
所属学会	学	2020年4月～ 新潟国際情報大学経営情報学部教授
	歴	視覚の認知心理学
主要業績	学	動機づけの教育心理学
	歴	意思決定の応用心理学
主要業績	学	① Sasaki, H., Hayashi, Y., & Ochi, T. (2024). Interaction of cognitive and motivational processes in asymmetric preferences for gains and losses. Basic and Applied Social Psychology, 46, 446 -455.
	歴	② Sasaki, H. & Watanabe, N. (2024). Is non-synesthetes' B Blue? Grapheme-color association improves non-synesthetes' detection in visual search. Consciousness and Cognition, 118, 103632.
主要業績	学	③ Hayashi, Y. & Sasaki, H. (2022). Effect of leaders' regulatory-fit messages on followers' motivation. Journal of Applied Social Psychology, 52, 496-510,
	歴	④ 佐々木宏之・皆川琴音 (2022). 「新型コロナウイルス感染拡大への不安・不正・不満がもたらすストレス・パーソナリティ・ストレス認知・コーピングの媒介モデルの検討」『新潟国際情報大学経営情報学部 紀要』, 5, 8-20.
主要業績	学	⑤ 佐々木宏之・林洋一郎 (2017). 「多母集団同時分析による回顧的ペアレンティング尺度の信頼性と妥当性の検討」『慶應経営論集』, 34, 233-246.
	歴	⑥ Sasaki, H. (2016). Object-color associations in preschool children's drawings. Current Psychology, 35, 410-413.
主要業績	学	⑦ Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2015). Regulatory fit in framing strategy of parental persuasive messages to young children. Journal of Applied Social Psychology, 45, 253-262.
	歴	⑧ Sasaki, H. (2014). Visual attention to reference frames affects perceptions of shape from shading. Perceptual and Motor Skills, 118, 850-862.
主要業績	学	⑨ Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2014). Justice orientation as a moderator of the framing effect on procedural justice perception. Journal of Social Psychology, 154, 251-263.
	歴	⑩ Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2013). Moderating the interaction between procedural justice and decision frame: The counterbalancing effect of personality traits. Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied, 147, 125-151.
主要業績	学	⑪ Sasaki, H. (2007). Dynamic grouping and interpolation induced by flickering stimuli. Perception, 36, 471-474.
	歴	⑫ Sasaki, H. & Kanachi, M. (2005). The effects of trial repetition and individual characteristics on decision making under uncertainty. Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied, 139, 233-246
主要業績	学	⑬ Sasaki, H. & Gyoba, J. (2002). Selective attention to stimulus feature modulates interocular suppression. Perception, 31, 409-419.
	歴	所属学会 日本心理学会、日本教育心理学会、日本基礎心理学会、東北心理学会、新潟心理学会



氏名 謝 凱雯
職名 教授
連絡方法 E-mail : hsieh@nuis.ac.jp
学歴 1993年3月 中央大学商学部卒業
1995年3月 中央大学商学研究科博士課程前期課程修了
2006年7月 中央大学総合政策研究科博士後期課程修了
学位 総合政策学博士（課程博士）
学歴 2006年8月 義守大学 国際ビジネス学科 准教授
2008年8月 国立高雄海洋科技大学サプライチェーン学科 准教授
2021年4月 三条市立大学工学部技術経営学科 准教授
受賞歴 2010年4月 最優秀教員賞（国立高雄海洋科技大学管理学院）
研究分野 経営学、中小企業論、アントレプレナーシップ、起業論
主要業績

シャ ガイブン

謝 凱雯 HSIEH KAIWEN

教授（2024年4月）

E-mail : hsieh@nuis.ac.jp

1993年3月 中央大学商学部卒業

1995年3月 中央大学商学研究科博士課程前期課程修了

2006年7月 中央大学総合政策研究科博士後期課程修了

総合政策学博士（課程博士）

2006年8月 義守大学 国際ビジネス学科 准教授

2008年8月 国立高雄海洋科技大学サプライチェーン学科 准教授

2021年4月 三条市立大学工学部技術経営学科 准教授

2010年4月 最優秀教員賞（国立高雄海洋科技大学管理学院）

経営学、中小企業論、アントレプレナーシップ、起業論

論文（2009年以降）

- ① 若林 悦子、謝 凱雯（2025）「インターンシップにおける効果的な役割の考察—燕三条の中小企業を事例に—」、「工学教育」第73巻2号, pp67-73。
- ② 謝凱雯（2024）「燕三条地域における起業ダイナミズム—COVID-19時期をベースにして—」、「企業研究」、第44号, pp175-186。
- ③ 謝凱雯、榊原一也（2024）「燕三条における企業家のセンスメーカー形成—COVID-19危機への対応をベースとして—」、「日本危機管理研究」、第33号, pp9-19。
- ④ 謝凱雯・陳志坪（2023）「台湾中小企業におけるレジリエンスの考察—新型コロナウイルス危機を通して—」、「危機管理研究」第31号, pp23-31。
- ⑤ Hsieh Kai-wen and Okada Junko（2020）「Japan's Headquarters for Ocean Policy and Ocean-related Government Agencies」, 『International Ocean Information』 Ocean Affairs Council, pp43-46。
- ⑥ 土屋隆一郎・謝凱雯（2015）「新興経済における政治的競争と企業の新規設立・廃業の関係についての予備的考察」、「日本中小企業学会論集」pp144-154。
- ⑦ 謝凱雯・榊原一也（2013）「日本服飾零售业UNIQLO, MUJI, SHIMAMURA 創新經營模式」、「商管科技季刊」、14巻第二期, pp121-142。
- ⑧ 謝凱雯・莊愛珠（2010）「新創企業之市場開發策略-以複合式餐廳為例」台灣運籌管理學會『運籌管理評論』第4巻第1期, pp35-47。
- ⑨ 謝凱雯（2009）「台湾の電機産業における新規創業企業の成長と市場開拓」、「企業研究」第15號, pp23-38。
- ⑩ 榊原一也・謝凱雯（2009）「企業家における実験的学習と成長」、高雄第一科技大學『應用外語學報』第11期, pp59-76。

著書

- ① 謝凱雯（2025）「台湾半導体産業の変容と牽引力」、「制度・戦略・組織の理論の潮流」中央大学出版部
- ② Hsieh, Kaiwen and WANG, Lianjuan（2022）「Women Entrepreneurs in the Business Sector」, Chinese Women in Leadership, Springer Nature, pp165-176。
- ③ Chen, Chih-Ping and Hsieh, Kai-Wen（2013）「Strategic alliance between Japan and Taiwan on the Chinese market: an empirical analysis of the IT industry」, 『Economic Integration Across the Taiwan Strait』 Edward Elgar, pp. pp154-168。
- ④ 楊東震・謝凱雯・劉進平・吳全成・蔡明智・蔡佳靜 共訳（2008）『管理学』 Schermerhorn Jr, J. R.（2009）. *Exploring management*. John Wiley & Sons. 滄海書局。

所属学会

日本ベンチャー学会、企業家フォーラム、日本危機管理学会、アジア政経学会、東アジア経済経営学会

その他

2024年1月～ 中央大学経済研究所 客員研究員

2023年4月～ 日本危機管理学会 理事

2022年10月～ 中央大学企業研究所 客員研究員

2021年4月～ 三条市経営力強化対策資金融資審査委員

2021年4月～ Mコンサルティンググループ合同会社 経営技術指導

2010年12月～ 2012年7月 国際交流センター長（国立高雄海洋科技大学）

2010年6月～ 8月 一橋大学経済研究科 客員研究員



氏名
職 名
連絡 方法
学 方 法
職 歴

学 位
職 歴

研 究 分 野
主 要 業 績

タカイ トオル

高井 透 TAKAI Toru
教授 (2024年4月1日)

toru@nuis.ac.jp

1990年 4月1日 早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程入学

1993年3月25日 早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程修了

博士 (商学) 早稲田大学 2006年2月14日

1993年4月1日 桜美林大学経済学部専任講師

2000年4月1日 日本大学商学部助教授

2002年4月1日～ 2024年3月 日本大学商学部教授

中堅・中小・ベンチャー企業の持続的競争優位性とグローバル戦略

「著書」

- ① 神田良・高井透・一般財団法人とうほう地域総合研究所「地域発エクセレント・カンパニー：地域を超えて地域に貢献する在地超地企業」生産出版 2025年3月
- ② 高井透『グローバル事業の創造』千倉書房 2007年
- ③ 高井透・山田敏之・原田保著「コア事業転換のマネジメント」2011年 同文館出版
- ④ 寺本義也・廣田泰夫・高井透著 一般財団法人海外投融資情報財団監修『日系企業の現地法人マネジメント-現地の人材育成と本社のあり方』中央経済社 2013年12月
- ⑤ 高井透「第1章「水産ビジネスにおける新規事業創造とイノベーション-日本水産(株)の養殖事業の開発事例」相原修編著『ボーダーレス化する食』創成社 2019年
- ⑥ 高井透「第7章非営利組織との連携による新規事業創造」高橋淑郎編著『非営利組織と営利組織のマネジメント』中央経済社 2020年3月
- ⑦ 高井透『後発で勝つための研究開発-知財戦略の立て方、進め方』第9章第1節「長期存続企業の後発参入戦略」技術情報協会編 2020年9月

「論文およびその他の業績」

- ① 高井透「水産養殖事業の持続可能性-養殖事業イノベーションの可能性と課題」『エコノミクス&ビジネス・フォーラム』9-16頁 日本経済学会連合 Vol.1/No.1 2025年3月
- ② 神田良・高井透「エクセレントカンパニーから学ぶ」『リスクマネジメントTODAY』30-31 March 2025
- ③ 高井透「資源大国であり、輸入大国という矛盾：日本林業の活性化とは」『世界経済評論ビジネスインパクト』<http://www.world-economic-review.jp/impact/article3599.html> 国際貿易投資研究所 2024年10月28日
- ④ 高井透「第Ⅱ部-地域中堅企業のコア事業転換-和田ステレンス工業と丸-海運の事例を中心に」『地域伝統企業のサステナビリティ-伝統と革新の融合-』九州産業大学産業経営研究所研究報告書 2023年8月 21-54頁
- ⑤ 高井透・内田亨「養殖事業のイノベーションと新規事業創造：陸上養殖事業の事例を中心に」『情報経営』情報経営学会 42巻2号 2022年6月 38-50頁
- ⑥ 高井透「グローバル化の壁を乗り越え飛躍する：ボーン・グローバル企業とボーン・アゲイン・グローバル企業の戦略行動」『研究開発リーダー』18巻10号 68-71 2022年1月
- ⑦ 高井透「企業危機をビジネスチャンスに転換する：(株)トルネックスの事例」研究開発リーダー 18巻11号 2022年 51-55頁
- ⑧ 高井透「専門事業への拘りがグローバルな競争優位性を創り出す：EIZO (株)の事例」『研究開発リーダー』18巻12号 2022年2月 66-72頁
- ⑨ 高井透「異質な競争・市場環境への適応が資源を高度化する：WPCコーポレーション (株) の事例」19巻1号 66-70頁 2022年3月
- ⑩ 高井透「グローバルニッチ企業の戦略：スギノマシン (株) の事例」『研究開発リーダー』19巻2号 71-76頁 2022年4月
- ⑪ 高井透「ボーングローバル企業の戦略を多角的視点で捉える」『研究開発リーダー』19巻3号 69-78 2022年5月
- ⑫ 高井透・神田良「世界進出のコンピタンス①-中堅・中小・ベンチャー企業の成功戦略」『生産性新聞』6面 2023年3月15日
- ⑬ 高井透・神田良「世界進出のコンピタンス②-中堅・中小・ベンチャー企業の成功戦-第一施設工業 垂直搬送装置で世界シェア」6面 2023年4月15日

「学会報告」

- ① 高井透・神田良「グローバルSMEの戦略行動特性に関する比較研究」『国際ビジネス研究学会第25回全国大会』早稲田大学 2018年11月11日
- ② 寺本義也・高井透・内田亨「グループイノベーションの探索的研究 -ブリ養殖事業の事例を中心に」『第80回日本情報経営学会全国大会』第80回日本情報経営学会全国大会 拓殖大学 2020年7月10日
- ③ 土井一生・高井透「地域中堅企業の成長ロジック」第6回九州産業大学×BIZCOLI コラボセミナー 九州産業大学産業経営研究所 公益財団法人九州経済調査協会主催 2021年2月19日

所 属 学 会

国際ビジネス研究学会 組織学会、経営学会、日本貿易学会、情報経営学会、パーソナルファイナンス学会、多国籍企業学会、



氏名
職 務
連 絡 方 法
学 歴

フジセ タケヒコ
藤瀬 武彦 FUJISE Takehiko
教授（2002年4月）
E-mail : fujise@nuis.ac.jp
1985年 早稲田大学教育学部教育学科体育学専修卒業
1987年 東海大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程修了
1992年 東海大学大学院医学研究科機能系専攻博士課程修了
体育学修士（東海大学、1987年3月）
博士（医学）（東海大学、1992年9月）
1994年4月～1998年3月 新潟国際情報大学専任講師
1998年4月～ 新潟国際情報大学助教授
2002年4月～ 新潟国際情報大学教授

学 位
職 歴

研 究 分 野

- ① 運動生理学（ウエイトトレーニング時の酸素消費量及び機械的効率）
- ② トレーニング科学（フリーウエイト運動の1RMと疾走能力との関係）
- ③ 肥満学（隠れ肥満及び痩せ願望の実態とボディイメージの歪み）
- ④ スポーツ史（オリンピック関連資料の収集と解説）

主 要 業 績

- 著書
① 藤瀬武彦（2007）.「筋力をつくるトレーニング」長澤純一編著『体力とはなにか』NAP, 190-206.

論文

〈ウエイトトレーニング関連の論文〉

- ① 藤瀬武彦（2025）「一般男女大学生及び陸上男女短距離選手における疾走能力とフリーウエイト運動の1RMとの関係—スクワット、ベンチプレス、デッドリフト及び三種目合計重量について—」経営情報学部紀要, 8, 61-70
- ② 藤瀬武彦（2024）「一般男女大学生におけるベンチプレス及びスクワットの1RM相対重量での最高反復回数」経営情報学部紀要, 7, 10-22.
- ③ 藤瀬武彦, 他（2020）「一般男子学生におけるフリーウエイト運動の% 1RMでの最高反復回数と酸素消費量—バーベルを用いたベンチプレス及びスクワットにおいて—」経営情報学部紀要, 3, 65-74.
- ④ 藤瀬武彦, 他（2009）「一般青年男女におけるベンチプレスの1RM相対重量での最高反復回数」トレーニング科学, 21, 225-238.
- ⑤ 藤瀬武彦, 他（2004）「新潟国際情報大学学生の形態、体力、及び運動能力：体格指数、皮下脂肪厚、及びバーベル挙上能力等について」情報文化学部紀要, 7, 227-256.
- ⑥ 藤瀬武彦, 他（2003）「短時間激運動後の回復期における高濃度酸素ガス吸入の効果：血中乳酸値及び運動能力の回復から」情報文化学部紀要, 6, 143-158.
- ⑦ 藤瀬武彦, 他（2002）「無酸素運動時の高濃度酸素ガス吸入が作業成績に及ぼす効果」情報文化学部紀要, 5, 265-282.
- ⑧ 藤瀬武彦, 他（1998）「試合形式の異なる空手道競技者における筋力発揮及び有酸素的作業能力の比較」情報文化学部紀要, 1, 203-215.
- ⑨ 藤瀬武彦, 他（1995）「一般青年男女における筋力評価尺度としてのバーベル挙上能力測定の試み」体育学研究, 39, 403-416.

〈健康づくり関連の論文〉

- ① 藤瀬武彦, 他（2023）「一般男女大学生の痩せ願望と理想体型並びに食習慣との関連について」経営情報学部紀要, 6, 46-54.
- ② 藤瀬武彦, 他（2022）「一般男女大学生の身体組成及び基礎体力に及ぼすコロナ禍における運動習慣の効果—皮下脂肪厚及びインピーダンス法による体脂肪率等の評価を中心に—」経営情報学部紀要, 5, 21-38.
- ③ 藤瀬武彦, 他（2021）「一般男女大学生の基礎体力に及ぼす新型コロナウイルス感染拡大時の活動自粛の影響—遠隔授業による自宅での運動と体力測定値の妥当性—」経営情報学部紀要, 4, 89-107.
- ④ 藤瀬武彦, 他（2018）「女子学生における痩せ願望及び理想体型と実測体型との関連について—形態数値の明らかなモデル選択による理想体型の客観的評価の試み—」経営情報学部紀要, 1, 1-18.
- ⑤ 藤瀬武彦, 他（2003）「歩行トレーニング時の高濃度酸素ガス吸入が皮下脂肪厚及び体周囲に及ぼす効果」新潟体育学研究, 21, 35-45.
- ⑥ 藤瀬武彦（2003）「日本人及び欧米人女子学生におけるボディイメージの比較」体力科学, 52, 421-432.
- ⑦ 藤瀬武彦（2001）「日本人青年女性における体型の自己評価と理想像：アジア人及び欧米人青年女性との比較」情報文化学部紀要, 4, 105-122.
- ⑧ 藤瀬武彦, 他（2000）「青年喫煙者の漸増負荷運動における作業成績及び生理的変量に及ぼす一時的喫煙中止の効果」情報文化学部紀要, 3, 187-202.
- ⑨ 藤瀬武彦, 他（1999）「青年男女における隠れ肥満者の頻度と形態的及び体力的特徴」体力科学, 48, 631-640.
- ⑩ 藤瀬武彦, 他（1999）「トレッドミル歩行時の二酸化炭素排出量及び血中乳酸値に及ぼす高酸素吸入の影響」情報文化学部紀要, 2, 221-235.

〈オリンピック関連の論文（研究ノート）〉

- ① 藤瀬武彦（2025）「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第七報—1936年第11回ベルリンオリンピックに関する収集品—」国際学部紀要, 10, 119-130.
- ② 藤瀬武彦（2024）「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第六報—1934年第4回国際女子オリンピック（国際女子競技大会）に関する収集品—」国際学部紀要, 9, 103-112.
- ③ 藤瀬武彦（2023）「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第五報—1932年第10回ロサンゼルスオリンピックに関する収集品—」国際学部紀要, 8, 121-129.
- ④ 藤瀬武彦（2022）「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第四報—1928年第9回アムステルダムオリンピックに関する収集品—」国際学部紀要, 7, 147-156.
- ⑤ 藤瀬武彦（2021）「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第三報—1924年第8回パリオリンピックに関する収集品—」国際学部紀要, 6, 97-105.
- ⑥ 藤瀬武彦（2020）「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第二報—1920年第7回アントワープオリンピックに関する収集品—」国際学部紀要, 5, 67-77.
- ⑦ 藤瀬武彦（2019）「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第一報—1912年、1940年、及び1964年夏季オリンピックに関する収集品—」国際学部紀要, 4, 145-157.

そ の 他

新潟県パワーリフティング協会理事・北信越学生陸上競技連盟副会長



氏名	フジタ ハルヒロ 藤田 晴啓 FUJITA Haruhiro
職名	教授 (2012年4月)
連絡方法	E-mail : fujita@nuis.ac.jp
researchmap	https://researchmap.jp/haru_fujita
学歴	1981年3月 宮崎大学農学部草地学科卒業 1983年3月 九州大学大学院農学研究科修士課程修了 1989年2月 キーーンズランド大学農学研究科博士研究課程修了
学位	Doctor of Philosophy (学術博士 The University of Queensland, 1989年8月)
職歴	1989年 4月 農林水産省草地試験場研究員, 誤差逆伝播ニューラルネットワーク研究 1992年 3月 国際農林水産業研究センター, 乾燥地保全研究 国際乾燥地農業研究センター上席研究者兼任, 乾燥地資源情報システム International Center for Agricultural Research in Dry Areas (ICARDA) 1995年10月 農林水産省四国農業試験場企画連絡室, 主任研究官 2000年 7月 日本国際協力システム業務第一部 2003年 4月 東洋大学国際地域学部国際観光学科教授 2005年 4月 東洋大学大学院 国際地域学研究科教授 2022年 4月 本学経営情報学部長 至現在
受賞歴	最優秀科学業績およびコミュニケーション開発賞 Technical Commission VI, 国際写真測量リモートセンシング学会, 1999年4月
研究分野	(1) AI・データサイエンス (2) 応用人類学/実験心理学・認知モデリング (3) 総合知/認知情報学/言語系生成AI
主要業績	① Fujita Haruhiro et al. (2025), Analysis of Sensory Impression Factor Structures of Jomon Potteries through a Semantic Differential Method Viewing 3D Models on MR equipment, Proceedings of International Conference on Computer Applications & Quantitative Methods in Archaeology (CAA) 2024. DOI https://zenodo.org/records/15067200 ② Fujita Haruhiro et al. (2025), Cognitive Structures of Sensory Impressions on Jomon Clay Figure Employing Semantic Differential Method by Mixed Reality Experiment. An extended abstract accepted for Computer Applications & Quantitative Methods in Archaeology (CAA) 2025. ③ Eisuke Chikayama, Toyohisa Nakada, Toru Miyao, Haruhiro Fujita, Prototype of Point cloud-Captioning Model for Jomon Pottery, Proceedings of the International Conference on Smart Cities - Volume 2, Lecture Notes in Electrical Engineering, Springer 2025 (in press). ④ Ayaka Nagumo, Kenta Ichikawa, Haruhiro Fujita, 14 Hands-on AI Practical Education, Proceedings of the International Conference on Smart Cities - Volume 2, Lecture Notes in Electrical Engineering, Springer 2025 (in press). ⑤ Fujita Haruhiro, Nagumo Ayaka, Ichikawa Kenta, Yew Kwang Hooi, Developments of AI Models from 1995 to 2024, Proceedings of the International Conference on Smart Cities - Volume 2, Lecture Notes in Electrical Engineering, Springer 2025 (in press). ⑥ Masatoshi Itagaki, Haruhiro Fujita, Image Conversion of Oyu Stone Circles using CycleGAN, Proceedings of the International Conference on Smart Cities - Volume 2, Lecture Notes in Electrical Engineering, Springer 2025 (in press). ⑦ Masatoshi Itagaki, Haruhiro Fujita, MaskedCycleGAN for Image Transformation of Oyu Stone Circles: A Comparison between U-Net and ResNet, Proceedings of the International Conference on Smart Cities - Volume 2, Lecture Notes in Electrical Engineering, Springer 2025 (in press).
所属学会	International Society of Computer Applications and Quantitative Methods, 日本情報考古学会
その他	東京国立博物館客員研究員 (考古資料デジタルデータの活用研究) にいがたGIS推進協議会アドバイザー, Python機械学習勉強会in Niigata
科学研究費補助事業採択課題	① 学術変革領域研究 (A) (公募研究) 「MR を活用した土器土偶心理実験と深層学習によるマテリアマインドの再現」(R7 ~ R8) (研究代表者) ② 挑戦的研究 (萌芽) 23K17520 「型式学とAI を融合したデータ駆動型研究基盤への挑戦」(R5 ~ R7) (研究代表者) ③ 基盤研究 (B) (一般) 22000511 「統計的画像処理と機械学習を併用した文化財のデジタル復元技術の基盤創出」(R4 ~ R7) (研究分担者) ④ 国際共同研究加速基金 (海外連携研究) 24KK0014 「ヨーロッパ先史装飾墓の保存と公開活用にむけたデジタルツイン基盤の構築」(R6 ~ R10) (研究分担者)



氏名	藤田 美幸 FUJITA Miyuki
職 務	教授 (2024年4月)
学 歴	E-mail : miyu@nuis.ac.jp 2007年9月 新潟大学大学院 現代社会文化研究科現代マネジメント専攻 博士前期課程修了 2016年3月 新潟大学大学院 現代社会文化研究科人間形成文化論専攻 博士後期課程修了
学 位	博士 (経済学) (新潟大学、2016年3月) 修士 (経営学) (新潟大学、2007年9月)
職 歴	新潟大学産学地域連携推進機構産学地域人材育成センター、ベンチャービジネス・ラボラトリー 博士インターシ ップ研究員 (2011.5 ~ 2011.11) チュラロンコン大学ビジネススクール 客員研究員 (2021.8 ~ 2022.8)
研 究 分 野	地域マネジメント、ツーリズムマネジメント、地域マーケティング、ツーリズムマーケティング、ツーリズムまちづ くり
主 要 業 績	論文 (2014年以降) ① 土屋薫, 須賀由紀子, 藤田美幸 (2025). 「まちあるきプログラム開発に向けた地域資源把握の試みーまち あるきチェックシートの開発と検証ー」『江戸川大学紀要』(35), 1-22 ② 土屋薫, 須賀由紀子, 藤田美幸 (2024). 「地域と関わる技術の醸成に関する考察ー「ICT まちあるき」にお ける地域愛着度の効果測定に向けてー」『江戸川大学紀要』(34), 367-380 ③ 藤田 美幸, 岡野 康弘, 後藤 あゆみ, 佐藤 菜南, 澤口 楓香, 寺平 あめり, 村山 柚妃. (2024). 「未利用資源 を地域資源へー葛根酒による長岡市山古志梶金地区における葛のブランディング戦略ー」『新潟国際情報 大学 経営情報学部 紀要』(7), 23-31 ④ 藤田 美幸, 北澤 道子, 明石 浩見. (2024). 「地域資源を媒介にしたアドベンチャーツーリズムの予備実験 ー長岡市山古志地区の葛を対象としてー」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』(7), 73-79 ⑤ 藤田美幸 (2022). 「国内アドベンチャーツーリズム研究の萌芽: 文献レビューからの一考察」『日本国際観 光学会自由論集』-Vol.6, 83-88 ⑥ FUJITA Miyuki, SATO Yasuko (2022) 「The Current Condition and Issues of Medical Tourism in Thailand : A Study on the Marketing Management Process」『NUIS Journal of International Studies』-No.7, 41-52 ⑦ 藤田美幸 (2022). 「バーチャルマラソン大会における健康スポーツ行動の関与度別の比較研究: ケーススタディ 「微笑みの国を歩いて、走って、旅気分! Virtual Fun Run Thailand」」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』 -5, 39-50 ⑧ 藤田美幸 (2021). 「オンラインスポーツツーリズムにおける参加動機と開催地への愛着に関する研究 ー『東 北みやぎオンライン復興マラソン』と『名古屋ウィメンズマラソン2020』の事例からー」『地域活性研究』(14), 135-144. ⑨ 藤田美幸 (2020). 「若年層化した個人競技的スポーツにおいてハイパフォーマンスを実現する組織マネジメ ント ー「スノーボード女性アスリートの強化支援」を事例としてー」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』 (3), 93-105. ⑩ 藤田美幸 (2019). 「ハイブリッドまちあるきによる地域資源の物語化ー2017ふるまちクエストを事例としてー」 『モバイル学会誌』9 (1/2), 1-7. ⑪ 藤田美幸 (2018). 「ユーザの動機づけとエンゲージメントの関連」『日本情報経営学会誌』38 (3), 83- 92. ⑫ 藤田美幸, 塚田 麻紀 (2018). 「ゲーミフィケーションを活用したモバイル・ヘルスケアサービス: ドコモ・ ヘルスケア「歩いておトク」を事例として」『日本情報経営学会誌』38 (3), 74-82. ⑬ 藤田美幸 (2017). 「デジタルとアナログの融合による地域活性化プラットフォームモデルの開発ー「ふるま ちクエスト」を事例としてー」『モバイル学会誌』7 (1/2), 23-28. ⑭ 藤田美幸 (2017). 「スポーツサービスにおけるモバイルの関係性および影響」『新潟国際情報大学情報文 化学部紀要』(2), 50-607. ⑮ 藤田美幸 (2016). 「ヘルスケアサービスとゲーミフィケーションの親和性ーユーザ特性に着目してー」『新潟 大学現代社会文化研究紀要』(62), 303-320. ⑯ Masayoshi Fukushima, Douglas Schutz, Miyuki Fujita (2016). THE NEED FOR SPEED FOR INNOVATION IN GLOBAL ORGANIZATIONS. Asia Pacific Conference on Information Management 2016, 51-63. ⑰ 藤田美幸, 高山誠 (2015). 「モバイルデバイスが引き起こすインスタントイノベーション」『日本情報経営 学会誌』35 (4), 72-80. ⑱ 藤田美幸 (2015). 「産業構造分析における勝敗マトリックスの有用性についてーフィットネスクラブ産業への 適用ー」『新潟大学現代社会文化研究紀要』(60), 67-84. ⑲ 藤田美幸 (2015). 「日本の社会構造の変化がもたらすICTヘルスケア」『新潟大学現代社会文化研究紀要』 (59), 163-180. ⑳ 藤田美幸, 岡野康弘, 高山誠 (2014). 「超高齢社会とICT化によるスポーツクラブのパーソナイズ市場への変化」『日 本経営スポーツ学会研究年報』(4), 42-61. 地域活性学会、日本国際観光学会、日本消費者行動研究学会、日本情報経営学会、スマートライフ学会 国土交通省: 越後平野における生態系ネットワーク推進協議会 自然環境活用部会 部会長 (2023-) 国土交通省: 越後平野生態系ネットワーク推進協議会 委員 (2021-) 国土交通省: 越後平野における生態系ネットワーク推進協議会 自然環境活用部会 委員 (2021-) 国土交通省: 越後平野における生態系ネットワーク推進協議会 生息環境検討部会 委員 (2021-) 地域活性学会 第8期 理事 (2023-) スマートライフ学会 理事 (2023-) 地域活性学会 北信越支部新潟支所長 (2022-) 地域活性学会 第7期 本部理事 (2021-2023) 新潟市西蒲区役所新庁舎整備事業基本設計業務委託受注候補者選定委員会 委員長 (2024-2025) 新潟市西蒲区新庁舎基本構想検討会議 委員 (座長) (2023-2024) 新潟市財産経営推進計画 委員 (2020-2022) 全日本スキー連盟, 日本スポーツ振興センター委託事業「女性アスリートの強化支援委託事業 (女性アスリート の競技大会等プログラム)」外部評価者 (2018-2020) 全日本スノーボード学生選手権大会 大会組織委員長 (2012-2018) 全日本スノーボード選手権中部地区大会 大会組織委員長 (2007-2019) 中部スノーボード協会 理事 (1995-) NOSAI コンプライアンス委員会 委員 (2019-2022)
所 属 学 会 そ の 他	



氏 名	阿部 聡 ABE Satoshi
職 名	准教授 (2016年4月)
連絡方法	E-mail : satabe@nuis.ac.jp
学 歴	2000年3月 新潟大学人文学部行動科学課程 卒業 2002年3月 新潟大学大学院人文科学研究科修士課程 修了 2011年3月 新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程満期退学
学 位	修士 (文学) (新潟大学、2002年3月)
職 歴	2005年 4月～2006年3月 新潟経営大学非常勤講師 2005年 4月～2011年3月 長岡工業高等専門学校非常勤講師 2005年10月～2006年3月 新潟大学非常勤講師 2009年 4月～2020年3月 新潟医療福祉大学非常勤講師 2010年 4月～2013年3月 新潟国際情報大学非常勤講師 2010年10月～2013年3月 新潟大学非常勤講師 2011年 4月～2013年3月 北陸大学非常勤講師 2013年 4月～2016年3月 会津大学短期大学部社会福祉学科講師 (専任)
研 究 分 野	機能言語学、英語教育、談話分析の応用としてのheavy metal studies
主 要 業 績	① 阿部聡 (2015).「童話『かちかち山』再話の比較 ―機能言語学的分析に基づく幼児への言語指導に関する一試案―『会津大学短期大学部研究紀要』(72) pp.119-127. ② 阿部聡 (2010).「日本語学術的テキストにおける主題-題述構造と主題進行パターン」『言語の普遍性と個別性』第1号, 新潟大学現代社会文化研究科. pp.53-68. ③ 阿部聡 (2004).「日本語のジャンル構造と語彙-文法的資源 ―テキスト形成的メタ機能を中心に―」『現代社会文化研究』(30) pp. 179-195. ④ 阿部聡 (2004).「観念構成的比喩としての名詞化」『欧米の言語・社会・文化』(10), pp. 1-29. ⑤ 阿部聡 (2002).「日本語におけるN-Rheme : 書記テキストにおける具現と機能について」『現代社会文化研究』(25), pp. 267-283.
所 属 学 会	日本機能言語学会 日本語用論学会 外国語メディア学会



氏名
職名
連絡方法
学歴

コミヤマ サトシ
小宮山 智志 KOMIYAMA Satoshi
准教授（2004年4月）

E-mail : komiyama@nuis.ac.jp

1994年 中央大学文学部社会学科卒業

1996年 中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士前期課程修了

1999年 中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程単位習得退学

学位
職歴
研究分野

社会学修士（中央大学、1996年3月）

1999年 中央大学文学部社会学科非常勤講師（2000年に本学着任）

社会調査（データサイエンス）やワークショップなどの手法を用いて、「新潟」を活性化させるアイデアを地域の皆様と共に考えております。激動する社会環境の中、「新潟」の豊かなコミュニティや素晴らしい自然を活かし、「新潟モデル」を創造していく所存です。

主要業績

論文

- ① (2025) 小宮山智志「インターネット検索データを用いた『佐潟』における取り組みの効果測定」『新潟国際情報大学国際学部紀要』 Vol.10
- ② (2024) 小宮山智志「コロナ禍の経験によるウェルビーイングの意識変化の解明」『公益財団法人かんぽ財団 令和5年度調査研究報告書』
- ③ 小宮山智志, 藤田美幸, 藤瀬武彦, 内田亨 (2023). 「地域住民と児童によるオンライン健康づくりイベントの試行ーソーシャルキャピタルと健康の関連についてー」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』 6, 1-10.
- ④ 小宮山智志 (2021). 「AI時代におけるファシリテーターの重要性について」(国際交流ファシリテーター特集論文編) -- (教育の新しい形を求めて: 「国際交流ファシリテーター」事業の回顧と展望)『新潟国際情報大学国際学部紀要』 (6), 22-24.
- ⑤ 小宮山智志 (2021). 「新興住宅地における災害時のSNSの情報伝播」『新潟国際情報大学経営学部 紀要』 4, 1-7.
- ⑥ 小宮山智志 (2019). 「台湾・日本における“姉妹古民家”の提案」『新潟国際情報大学経営情報学部 紀要』 2, 13-20.
- ⑦ 小宮山智志, 小林 満男 (2016). 「情報感度の学習成果に及ぼす影響」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 2, 23-30.
- ⑧ 小宮山智志 (2008). 「モチリゼーションが発達した地方都市における消費者の店舗選択要因の解明」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』 11, 31-39.
- ⑨ 小宮山智志 (2007). 「コンピュータ活用の差異がE-Learningの評価に及ぼす影響」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』 10, 99-106.
- ⑩ 小宮山智志 (2004). 「階層線形モデルによる“地域不公平感”の分析」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』 7, 161-178.
- ⑪ 小宮山智志 (2003). 「三条・燕市製造業間のデジタルデバインド」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』 6, 108-121.
- ⑫ Komiyama, S. (2000). Perception of “effort,” “Ability,” and “Equal Opportunity” in Japanese Society. Miyano, M., (Ed.), *Japanese Perception of Social Justice: How Do They figure out What Ought to Be*, Ministry of Education, Sports and Culture (pp. 87-100). Grant-in-Aid for Scientific Research (B) Report, 09410050.
- ⑬ 小宮山智志 (2000). 「不公平感の地域間格差研究におけるマルチレベル分析の応用」『中央大学文学部紀要』 183, 199-213.
- ⑭ 小宮山 智志 (1998). 「消費税・所得税に関する世論についての試論的研究--消費税増税・所得税減税と消費税減税・所得税増税, どちらを人々は望むか」『中央大学社会科学研究所年報』 3, 67-79.
- ⑮ 小宮山智志 (1996). 「公正観の深層理解: 自由面接データの分析」, 宮野勝編『社会的公正の研究: 理論・実証・応用』平成4-6年度科学研究費成果報告書 (04401007), 中央大学, 154-165.

所属学会
その他

数理社会学会、日本社会学会、関東社会学会、日本行動計量学会

令和6年度 新潟市総合計画2030有識者会議（都市の活力向上部会）部会長、新・新潟市教育ビジョン策定に関する有識者会議委員（令和6年度）、湿地プロジェクト補助金（令和6年度）、佐潟周辺自然環境保全連絡協議会委員（座長）、中野小屋中学校学校運営協議会委員、赤塚小学校学校運営協議会委員、白根高等学校評議会委員、中原邸保存会会員、佐潟と歩む赤塚の会会員など。



氏名
職 名
連 絡 方 法
学 位 歴

ササキ トウコ
佐々木 桐子 SASAKI Toko
准教授（2008年4月）

E-mail : tohko@nuis.ac.jp

1994年3月 東洋大学経営学部経営学科卒業

1996年3月 東洋大学大学院経営学研究科経営学専攻修士課程修了

1996年4月～ 1998年3月 名古屋大学大学院経済学研究科大学院研究生

2001年3月 名古屋大学大学院人間情報学研究科博士後期課程満期退学

経営学修士（東洋大学、1996年3月）

2001年4月～ 2008年3月 新潟国際情報大学情報文化学部専任講師

2008年4月～ 同大学准教授

2005年～ 2020年 新潟大学経済学部非常勤講師

研 究 分 野

経営工学, 交通工学

① 生産システム、ロジスティクスシステム、および道路交通システムのシミュレーション分析

② サプライチェーンの途絶リスクのシミュレーション分析

主 要 業 績

論文

① Toko SASAKI, Akira NAGAMATSU. (2024). Risks of Supply Chain Disruption and Market Concentration: Constructing Conceptual Models of Transaction Structures in Supply Chain Networks, *Communications in Computer and Information Science*, 285-298.

② Toko SASAKI, Akira NAGAMATSU. (2024). Simulation Modeling of a Conceptual Model for Supply Chain Risks in Japan's Automobile Industry, *IIAI Letters on Business and Decision Science*, 4, pp.1-12.

③ Toko SASAKI. (2013). Disaster Management and JIT of Automobile Supply Chain, *Journal of Niigata University of International and Information studies*, 16, 81-95.

④ 佐々木桐子 (2010). 「バイオメトリクスのユーザー受容性に関する諸課題～指静脈認証による出席管理システムの事例～」『バイオメディカル・ファジィシステム学会誌』12 (1), 79-86.

⑤ 佐々木桐子 (2009). 「指静脈認証による出席管理システムの開発」『日本情報経営学会学会誌』29 (4), 49-55.

⑥ 佐々木桐子 (2006). 「高等学校における教科「情報」に関する実態調査および大学入学時の情報リテラシー能力の変化」『オフィス・オートメーション』27 (2), 69-75.

⑦ Toko SASAKI. (2001). A Module-Based Simulation Modeling and Management for Supply Chain Systems on Daily Commodities, *Studies in Informatics and Sciences*, 13, 81-89.

⑧ 佐々木桐子 (2000). 「ロジスティクスシステムのシミュレーションモデリングと解析」『オフィス・オートメーション』20 (3), 76-82, 2000.

⑨ 佐々木桐子 (1998). 「生産・物流システムシミュレーションのモデル化と解析」『オフィス・オートメーション』18 (4-2), 133-136.

⑩ 佐々木桐子 (1997). 「配車・費用を考慮したロジスティクスシミュレーションのモデル化と解析」『オフィス・オートメーション』18 (4), 99-102.

所 属 学 会
そ の 他

日本経営システム学会, 情報システム学会, 日本シミュレーション学会

新潟県: 内水面漁場管理委員会委員 (2024.12 ～)、国土利用計画審議会委員 (2023.1 ～)、大規模小売店舗立地審議会委員 (2020.11 ～)、柏崎マリーナ指定管理者中間評価委員会委員 (2020.11 ～ 2022.10、2019.9 ～ 2020.3、2015.7 ～ 2016.3)、建築審査会委員 (2020.4 ～)、政府調達苦情検討委員会委員 (2018.1 ～)、地方港湾審議会委員 (2012.6 ～ 2022.5)

新潟市: 環境審議会地球温暖化対策部会委員 (2024.10 ～)、環境審議会委員 (2020.8 ～)、個人情報保護審議会委員 (2007.4 ～ 2011.3)

新潟労働局: 新潟県最低賃金審議会 (本審) 公益代表委員 (2023.5 ～)、新潟県最低賃金専門部会公益委員 (2023.5 ～)、新潟県自動車 (新車)、自動車部分品・附属品小売業最低賃金専門部会公益委員 (2015.9 ～)、公共調達監視委員会委員 (2015.2 ～)

北陸地方整備局: 大河津分水路改修事業監理委員会委員 (2023.4 ～)、信濃川水系流域委員会中流部会委員 (2023.4 ～)、信濃川水系流域委員会委員 (2023.4 ～)、荒川水系流域委員会委員 (2020.1 ～)、総合評価審査委員会委員 (2019.5 ～)

そ の 他: JR信濃川発電所に係る河川環境検討会委員 (2024.9 ～)、一般社団法人北陸信越貸切バス適正化センター会長 (2019.6 ～)、新潟県貨物自動車運送適正化事業実施機関評議委員会委員長 (2020 ～)



氏名
職名
連絡方法
学歴
学位
学職
研究分野
主要業績

ヤマシタ イサオ

山下 功 YAMASHITA Isao

准教授（2013年4月）

E-mail : iyamashi@nuis.ac.jp

1996年3月 横浜国立大学経営学部会計・情報学科卒業

1998年3月 横浜国立大学大学院経営学研究科修士課程修了

2009年3月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究所博士課程後期単位取得満期退学

修士（経営学）（横浜国立大学、1998年3月）

1998年3月～2003年4月 ミツミ電機株式会社 経理部

2007年9月 新潟国際情報大学専任講師

管理会計、原価計算、会計情報システム、公共交通経営

論文

- ① 山下功（2023）.「エドモントン都市圏の公共交通における新しい運賃収受システム「Arc」（第2報）」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』6, 40,-45.
- ② 山下功（2022）.「エドモントン都市圏の公共交通における新しい運賃収受システム「Arc」」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』5, 67-71.
- ③ 山下功（2021）.「カナダ主要都市における公共交通の運賃制度」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』4, 108-117.
- ④ 山下功（2021）.「遠隔授業の実施事例と授業改善」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』4, 134-139.
- ⑤ 山下功（2020）.「公共交通事業における日本とカナダの比較—独占と競争—」『年報 財務管理研究』31, 152-158.
- ⑥ 山下功（2019）.「エドモントンの公共交通の運賃制度」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』2, 161-172.
- ⑦ 山下功（2018）.「セグメント情報による新潟交通株式会社の分析」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』1, 57-68.
- ⑧ 山下功（2017）.「旅客運輸事業の利益性に関する考察: 鉄道、バス、タクシー会社のセグメント情報による」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』Vol.3, 61-69.
- ⑨ 山下功（2016）.「会計ソフトウェアにおける管理会計情報に関する考察」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』Vol.2, 90-95.
- ⑩ 山下功（2015）.「文系研究室における低予算の産学連携」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』Vol.1, 92-97.
- ⑪ 山下功（2013）.「大学初年次教育における作文の試行事例」『新潟国際情報大学 情報文化学部紀要』No.16, 97-103.
- ⑫ 山下功（2012）.「無料公衆無線LANの現状: 収益・費用構造を中心に」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』No.15, 81-87.
- ⑬ 山下功（2011）.「授業評価アンケートシステムの費用対効果: 新潟国際情報大学における導入事例」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』No.14, 83-91.
- ⑭ 山下功（2010）.「マークシートによる授業支援システムの費用対効果: 新潟国際情報大学における試行導入事例」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』No.13, 115-123.
- ⑮ 山下功（2005）.「企業間連携における原価管理 組立型総合電子部品メーカーの事例研究」『財務管理研究』16, 101-110.
- ⑯ 山下功（2005）.「企業間原価管理の事例研究 組立型総合電子部品メーカーの事例」『横浜国際社会科学研究所』9 (6), 95-112.
- ⑰ 山下功（1998）.『電力事業における原価管理』横浜国立大学大学院経営学研究科修士論文.

所属学会 日本原価計算研究学会、日本管理会計学会、日本財務管理学会、日本会計研究学会、情報システム学会

その他 新潟国際情報大学社会連携センター講師（2007年度～）
新潟市西区自治協議会委員（2009年4月～2011年3月）
新潟県下越地区吹奏楽連盟代議員（2010年度）
新潟市情報システム関連業務（計7件、2015～2024年度）
魚沼市数学おもしろ講座講師（2016年度～）
新潟県高齢者大学講師（2017年度）
アルバータ大学客員教授（2018年9月～2019年8月）
新潟県立巻総合高等学校評議員（2021～2023年度）
新潟市水道事業経営審議会 副会長（2023年10月～2025年9月）



氏名	イマイ ヒロノリ 今井 裕紀 IMAI Hironori
職名	講師 (2019年9月)
連絡方法	E-mail : imai@nuis.ac.jp
学歴	2006年3月 国際基督教大学教養学部人文科学科卒業 2013年3月 慶應義塾大学大学院経営管理研究科経営管理専攻修士課程修了 2019年3月 同志社大学大学院総合政策科学研究科技術・革新的経営専攻一貫制博士課程修了
学位	博士 (技術・革新的経営) (同志社大学、2019年3月取得)
職歴	2006年 4月～ 2011年3月 アルプス電気株式会社 2013年 1月～ 2015年3月 西武文理大学サービス経営学部ヒューマンサービスセンター研究員 2016年 4月～ 2020年3月 立教大学経営学部兼任講師 2018年10月～ 2019年3月 横浜国立大学経営学部非常勤講師
研究分野	組織行動論 産業・組織心理学
主要業績	① 林洋一郎・今井裕紀 (2024)「職務態度概念の多様化と課題」『哲学』152, 59-103. ② 今井裕紀・林洋一郎 (2022)「職務要求がアスピレーションの下方修正を介して抑うつに与える影響—個人資源と職務資源の調整媒介効果—」『慶應経営論集』38 (1), 43-59. ③ 今井裕紀・林洋一郎 (2020)「職務上の資源が職務要求を介してワーク・ファミリー・コンフリクトに与える影響—雇用形態に注目した調整媒介モデル—」『慶應経営論集』37 (1), 1-13. ④ 今井裕紀 (2019)「慢性疾患を持つ従業員の機能的制限がディストレスとウェルビーイングに与える影響についての研究」同志社大学博士学位論文. ⑤ Imai, H. (2018). An analysis of the association between functional limitation and distress among employees with chronic illness: Moderating roles of gender and employment status. <i>Doshisha Policy and Management Review</i> , 19 (2), 135-146. ⑥ 今井裕紀 (2017)「病気と社会的地位が従業員の精神的健康に与える影響」『慶應経営論集』34 (1), 177-185.
所属学会	経営行動科学学会 産業・組織心理学会 新潟心理学会 Academy of Management American Psychological Association American Sociological Association
その他	経営行動科学学会監事2020年4月～ 2022年3月、理事2022年4月～ 2024年3月 『経営行動科学』編集委員2020年4月～ 2024年3月 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究「不利な属性を持つ従業員のストレスとダイバーシティ風土の効果についての検証」研究代表者2021年4月～ 2025年3月 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C)「組織で働くプロフェッショナルの働きがいの研究:「仕事の意味」の視点から」研究分担者2021年4月～ 2025年3月

経営情報学部 情報システム学科

阿部 淑人

安藤 篤也

石井 忠夫

宇田 隆幸

梅原 英一

桑原 悟

小林 満男

佐藤 恵一

近山 英輔

河原 和好





氏名
職 名
連 絡 方 法
学 歴

学 位
職 歴

研 究 分 野
主 要 業 績

アベ ヨシト

阿部 淑人 ABE Yoshito

教授 (2024年4月)

abey@nuis.ac.jp

新潟大学工学部電子工学科卒業

新潟大学大学院工学研究科電子工学専攻修了

新潟大学大学院自然科学研究科生産科学専攻修了

博士 (工学), 新潟大学, 1998年3月

大日本印刷株式会社生産総合研究所 (15年)

新潟県工業技術総合研究所/新潟県産業労働部 (21年)

コンピュータシミュレーション/コンピュータビジョン/コンピュータグラフィックス
(著書)

① 松木真, 阿部淑人, 大久保宏美, 角谷繁明, 小寺宏暉, 藤井雅彦 (2024). 『日本画像学会 シリーズデジタルプリント技術「画像処理」』東京電機大学出版局

② 阿部淑人 (2022). 『製造DX 推進のための外観検査自動化ガイドブック』CMC リサーチ

(論文)

① Z.Chen, S.Muramatsu, Y.Abe (2016) Fast Image Super Resolution via Multiple Directional Transforms. Proc. IEEE ICIP 2016, pp.1434-1438, Phenix, AZ, USA.

② 今泉, 阿部, 藤吉, 貴家 (2010) 「一方向性ハッシュ関数を用いたデジタル動画画像の効果的アクセス制御方式」『映像情報メディア学会誌』64 (11), pp.1621-1627.

③ S. Imaizumi, M. Fujiyoshi, Y. Abe, and H. Kiya (2007) Collusion attack-resilient hierarchical encryption of JPEG 2000 codestreams with scalable access control, Proc. IEEE ICIP, pp.11-137- 140, San Antonio, TX, USA.

④ Y.Takahashi, H.Kikuchi, S.Muramatsu, Y.Abe, and N. Mizutani (2005) A New Color Demosaicing Method Using Asymmetric Average Interpolation and Its Iteration. IEICE Trans. Fundamentals, E88 (8), pp.2108-2116.

⑤ H. Kikuchi, H. Sato, S. Hasebe, N. Mizutani, S. Muramatsu, S. Sasaki, J. Zhou, S. Sekine, Y. Abe, I. Tofukuji, and M. Nakashizuka, (2003) Extra encoding of fine grayscale data into 8-bit sRGB color space, Opt. Eng, 42 (7), pp.1940-1948.

⑥ H. Kikuchi, H. Sato, S. Hasebe, N. Mizutani, S. Muramatsu, S. Sasaki, Z. Jie, S. Sekine, Y. Abe, and M. Nakashizuka (2002) Mapping of Fine Grayscale Data into the sRGB Color Space, Proc. ITC-CSCC, Vol.2, pp.987-990, Phuket, Thai.

⑦ Y.Abe (2002) A New Method of Designing a Dither Matrix. IEICE Trans. Fundamentals, E85A (7), pp.1702-1709.

⑧ Y.Abe (2001) Digital Halftoning with Optimized Dither Array, Proc. IEEE ISCAS, pp.517-520, Sydney, Australia.

(解説文・招待講演等)

① 阿部 (2024) デジタルツイン時代の数値最適化, 日本画像学会誌, 63 (5), pp.89-93.

② 阿部 (2022) Orange で楽して Python で得する話 - 気楽に始めるデータサイエンス-, 新潟大学大学院自然科学研究科, 産業特論, 新潟市.

③ 阿部 (2022) 質感エンジニアリング - 質感の測定技術・表現技術 -, 砥粒加工学会北陸信越地区部会, 新潟市 (オンライン)

④ 阿部 (2019) 地域課題の解決に向けた画像関連技術による取組, 電子情報通信学会画像工学研究会, 新潟市.

⑤ 阿部 (2019) 戦略的情報通信研究開発推進事業で取り組んだ2課題の事例紹介, 電子情報通信学会コミュニケーションクオリティ研究会, 新潟市.

(口頭発表)

① 阿部 (2024) 方形タイルの非晶性平面充填と連続模様の生成, 映像メディア処理シンポジウム, 御殿場市.

② 阿部 (2017) 確率的進化手法によるプロシージャルテクチャの自動合成について, 映像メディア処理シンポジウム, 伊豆市.

所 属 学 会
そ の 他

電子情報通信学会 (IEICE), 情報システム学会, 日本画像学会

国立研究開発法人 産業技術総合研究所地域連携室 連携アドバイザー

電子情報通信学会 映像メディア処理シンポジウム実行委員

日本画像学会 画像処理技術部会委員

新潟県立巻総合高等学校 学校評議員



氏名 安藤 篤也
職 教授
連絡 学 絡 方 法
学 歴
職 位 歴

受賞 歴
研究 分 野
主 要 業 績

アンドウ アツヤ

安藤 篤也 ANDO Atsuya

教授 (2019年10月)

E-mail : atsuya@nuis.ac.jp

1990年3月 北海道大学大学院 工学研究科 情報工学専攻 修士課程修了 修士 (工学)

2013年3月 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士課程修了博士 (工学)

博士 (工学) 筑波大学 2013年3月

1990年4月～2000年3月 日本電信電話株式会社・NTT無線システム研究所 (入社)

2000年4月～2003年3月 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 環境適応通信研究所 (出向)

2003年4月～2014年6月 NTTアクセスサービスシステム研究所 (復帰)

2014年7月～2019年9月 NTT未来ねっと研究所

2014年9月～2020年3月 東京理科大学非常勤講師

2016年6月 電子情報通信学会英文論文誌 (C分冊・エレクトロニクス) 論文賞受賞

無線通信

- ① Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2024). Validity of market economic analysis utilizing Maxwell's electromagnetic equations. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 20 (6), 1635-1661.
- ② Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2024). Evaluation of production systems from a new perspective of spin glass theory in statistical mechanics. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 20 (2), 411-435.
- ③ Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2023). Securing a synchronization zone to realize a high efficiency production based on the generalized theory of relativity. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 19 (1), 101-121.
- ④ Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2022). Analysis of the throughput of the production system with the aid of general relativity. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 18 (4), 1071-1088.
- ⑤ Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2021). Optimizing sales profit processes using impulse control. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (6), 1887-1905.
- ⑥ Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2021). Evaluation of production flow system utilizing expected high-volume effect rate. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (4), 1203-1224.
- ⑦ Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2021). Spatial properties of production flow system based on riemannian manifold structure. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (3), 831-851.
- ⑧ Shirai, K., Amano, Y., & Ando, A. (2021). Analytical mechanics approach to conservation in production field. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (1), 67-91.
- ⑨ 長谷川雅人・長敬三・安藤篤也 (2018). 「周波数選択性反射板を用いた2周波数共用水平偏波反射板付ダイポールアンテナ」『電子情報通信学会論文誌』 101-B (9), 737-748.
- ⑩ Cho, K., So, H., & Ando, A. (2016). HPBW control of dipole antenna with frequency selective reflector using different size elements. IEICE Communications Express, 5 (3), 90-94.
- ⑪ So, H., Ando, A., Seki, T., Kawashima, M., & Sugiyama, T. (2014). Multiband sector antenna with same beamwidth employing multiple woodpile metamaterial reflectors. IEICE Trans. Electron., E97-C (10), 976-985.
- ⑫ Ueno, S., Ando, A., Seki, T., Takatori, Y., & Hiraguri, T. (2014). Experimental investigations of co-channel interference reduction effect at high elevation base station using beam tilt and orthogonal polarization. Hindawi, International Journal of Antennas and Propagation, 2014 (8), Article ID 532743.
- ⑬ So, H., Ando, A., Seki, T., Kawashima, M., & Sugiyama, T. (2014). Directional multi-band antenna employing frequency selective surfaces. IET Journals, Electronics Letters, 49 (4), 243-245.
- ⑭ Ando, A., Kondo, A., & Kubota, S. (2008). A study of radio zone length of dual-polarized omnidirectional antennas mounted on rooftop for personal handy-phone system. IEEE Trans. Veh. Technol., 57 (1), 2-10.
- ⑮ Ando, A., Taga, T., Kondo, A., Kagoshima, K., & Kubota, S. (2008). Mean effective gain of mobile antennas in line-of-sight street microcells with low base station antennas. IEEE Trans. Antennas Propagat., 57 (1), 3552-3565.
- ⑯ Ando, A., Taga, T., Kagoshima, K., Kondo, A., & Kubota, S. (1998). Novel microstrip antenna with rotatable patch fed by coaxial line for personal handy-phone system units. IEEE Trans. Antennas Propagat., 56 (8), 2747-2751.
- ⑰ 山田渉・北直樹・安藤篤也・伊藤俊夫 (2008). 「5.2GHz帯ストリートマイクロセル環境における指向性アンテナを用いた基地局間MIMO伝搬特性と伝搬特性推定法」『電子情報通信学会論文誌』 91-B (3), 260-271.
- ⑱ Ando, A., Honma, Y., & Kagoshima, K. (1998). A novel electromagnetically coupled microstrip antenna with a rotatable patch for personal handy-phone system units. IEEE Trans. Antennas Propagat., 46 (6), 794-797.
- ⑲ 常川光一・鹿子嶋憲一・安藤篤也 (1992). 「小形無線機アンテナの多重波中利得と筐体長の関係」『電子情報通信学会論文誌』 75-B-II (10), 705-707.

所属 学 会
そ の 他

電子情報通信学会 (IEICE) 米国電気電子学会 (IEEE)

2017年1月～2017年3月 筑波大学システム情報工学研究科 学位論文審査委員会委員 (副査)

2019年1月～2019年3月 筑波大学システム情報工学研究科 学位論文審査委員会委員 (副査)

2020年8月6日 重要産業技術基盤調査勉強会講師 (経済産業省)

2021年1月～2021年3月 筑波大学システム情報工学研究科 学位論文審査委員会委員 (副査)



氏名 石井 忠夫
連絡方法 E-mail : ishii@nuis.ac.jp
学歴 1980年 山形大学工学部電子工学科卒業
2000年 北陸先端科学技術大学院大学情報処理学専攻博士後期課程修了
工学修士 (山形大学、1982年3月)
博士 (情報科学 北陸先端科学技術大学院大学、2000年3月)
職歴 1982年4月～1994年 3月 日立製作所計測器事業部 (旧、那珂工場) で理化学分析装置のコンピュータソフトウェア設計開発に従事
2000年4月～2001年 3月 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科教務補佐員
2015年9月～2016年 8月 Łódź大学心理学部認知科学科客員教授
2023年6月～2023年11月 新潟大学工学部 非常勤講師

研究分野 1) 非標準論理、特にnon-Fregean logicの体系の研究
2) 構成的型理論に基づいたソフトウェア発展機構の研究

主要業績

イシイ タダオ

石井 忠夫 ISHII Tadao

教授 (2018年4月)

E-mail : ishii@nuis.ac.jp

1980年 山形大学工学部電子工学科卒業

2000年 北陸先端科学技術大学院大学情報処理学専攻博士後期課程修了

工学修士 (山形大学、1982年3月)

博士 (情報科学 北陸先端科学技術大学院大学、2000年3月)

1982年4月～1994年 3月 日立製作所計測器事業部 (旧、那珂工場) で理化学分析装置のコンピュータソフトウェア設計開発に従事

2000年4月～2001年 3月 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科教務補佐員

2015年9月～2016年 8月 Łódź大学心理学部認知科学科客員教授

2023年6月～2023年11月 新潟大学工学部 非常勤講師

1) 非標準論理、特にnon-Fregean logicの体系の研究

2) 構成的型理論に基づいたソフトウェア発展機構の研究

論文

- ① Ishii, T. (2024) A simulation of connexive logic based on pair sentential calculums, *The booklet of abstracts of IX Workshop on Connexive Logic*, September 8-9, Łódź Poland, pp.20-24.
 - ② Ishii, T. (2024) An Expression of Object-Oriented Class in Martin-Löf's Type Theory, ES-TCON 2024 (International Conference on Smart Cities), Universiti Teknologi PETRONAS, Kota Kinabalu, Sabah, Malaysia.
 - ③ 石井忠夫 (2020). 論理における真理値の複素数表記, 『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』, 4, 1-13.
 - ④ Ishii, T. (2018). The definition of sequential machine by PSC, *Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics*, (1), 19-32.
 - ⑤ Ishii, T. (2017). Modalities on pair sentential calculus PSC, the 9th International Workshop on Logic and Cognition : Non-classical Modal and Predicate logics, SunYatsen University (広州、中国), December 4-8, 1-3.
 - ⑥ Ishii, T. (2017). Some syntactical and semantical properties for pain sentential calculus PSC, *Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics*, (3), 12-26.
 - ⑦ Ishii, T. (2016). SCI for pair-sentence and its completeness, the Conference on Non-Classical Logics, Theory and Applications, University of Łódź, September 5-7, Poland, Vol.8, 61-65.
 - ⑧ Ishii, T. (2016). A syntactical comparison between pair sentential calculus PSC and Gupta's definitional calculus Cn], *Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics*, (2), 1-13.
 - ⑨ Ishii, T. (2015). A system of pair sentential calculus that has a representation of the Liar sentence, *Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics*, (1), 1-10.
 - ⑩ Ishii, T. (2014). SCI for Pair-Sentence, the 13th Studia Logica International Conference on Trends in Logic XIII, University of Łódź, Poland, 10-12.
 - ⑪ 石井忠夫 (2010). 「構成的型理論に基づいた定理証明プログラムの試作」, 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』, 13, 71-84.
 - ⑫ 石井忠夫 (2009). 「ソフトウェア仕様とプログラムの導出」, 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』, 12, 141-150.
 - ⑬ 石井忠夫 (2007). 「ソフトウェア仕様の差分について」, 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』, 10, 147-154.
 - ⑭ Ishii, T. (2006). A formal theory of the calculus of indication, *Journal of Niigata University of International and Information Studies Department of Information Systems School of Information and Culture*, (9).
 - ⑮ Ishii, T. (2001). An Extension of Martin-Löf's Type Theory with an Evolution Relation, *Proceeding of the 34th MLG meeting at Echigo-Yuzawa*, January 9-12, Japan, 33-37.
 - ⑯ Ishii, T. (1999). Modality, implication and identity, *XLV History of Logic Conference*, October 26-27, Jagiellonian University, Kraków, Poland.
 - ⑰ Ishii, T. (1999). A note on varieties of PCI-algebras with EDP, *Bulletin of the Section of Logic*, University of Łódź, vol.28, Nr.2, 75-81.
 - ⑱ Ishii, T. (1998). Propositional calculus with identity, *Bulletin of the Section of Logic*, University of Łódź, vol.27, Nr.3, 96-104.
 - ⑲ Ishii, T. (1997). Propositional calculus with identity, *Proceedings of the 31st MLG meeting at Miho, Shimizu*, November 24-26, Japan, 22-24.
- 所属学会 日本数学会、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、情報システム学会
その他 情報システム学会編集委員 (2017年4月～)
情報処理学会IS教育委員 (2020年4月～)



氏名
連絡方法
学歴

ウダ タカユキ
宇田 隆幸 UDA Takayuki
教授 (2016年4月)

E-mail : uda@nuis.ac.jp

学部課程：図書館情報大学 (卒業, 現. 筑波大学) 学芸学士
修士課程：図書館情報大学大学院 (修了, 現. 筑波大学) 修士 (情報学)
博士課程：筑波大学大学院 (中退)、東北大学大学院 (修了) 博士 (情報科学)
博士 (情報科学)、東北大学、2009年9月

学職
位歴

【常勤、正規】

株式会社日本総合研究所 (システム開発職) (9年)、株式会社ジョイン・システム開発 (代表取締役) (9年)、アラン株式会社 (CTO、システム開発事業部長) (13ヶ月)、株式会社ネオジェイエスケー (取締役) (5年)、学校法人岩崎学園 (教職員) (2年)、学校法人近畿大学 (工業高専教授) (6年)

【非常勤】

田園調布学園大学社会福祉学部社会福祉学科 (非常勤講師) (3年)、東京工業高等専門学校情報工学科 (非常勤講師) (3年)

受賞歴

研究成績優秀 図書館情報大学学長 (兼. 筑波大学学長) より賞状授与 (2004年3月)

研究分野

知識処理 (人工知能、自然言語処理、Webマイニング)
社会科学分野・自然科学分野の領域に関してデータ分析・知識発見に関する研究を行っています。研究成果は、実社会での行動指標 (意思決定の材料) になります。

主要業績

論文

- ① Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., Uda, T. (2024) Evaluation of Production Systems from a New Perspective of Spin Glass Theory in Statistical Mechanics. *International Journal of Innovative Computing, Information and Control* 20 (2), 411-435.
- ② 宇田隆幸・木下哲男 (2010). 「擬似投票方式に基づくハイブリッドフィルタリングシステムにおける推薦予測精度の改良」『情報処理学会論文誌』, 51 (2), 542-554.
- ③ 宇田隆幸 (2009). 「擬似投票方式に基づくハイブリッド型情報推薦システムに関する研究」東北大学 博士学位論文.
- ④ 石川徹也・宇田隆幸 (2006). 「情報フィルタリングの利用システム」『情報の科学と技術』, 56 (10), 458-463.
- ⑤ Uda, T., Kinoshita, T. (2007). Improvement of Pseudo-voting method in Recommender Systems. *Proc. 1st. Int. Workshop on Information Credibility on the Web (WISCOW07)*, JSAI, 41-48.
- ⑥ 宇田隆幸・藤井敦・石川徹也 (2005). 「テキスト情報を対象としたハイブリッド型情報推薦システムにおける擬似投票方式」『情報処理学会論文誌』, 45 (5), 1246-1255.

その他

- ⑦ 宇田隆幸 (2014). 「名張市民意識調査アンケートの分析」名張市宛報告書.
- ⑧ 宇田隆幸 (2014). 「名張商工会議所における貸室管理システムについての分析報告」名張市商工会議所宛報告書.
- ⑨ 宇田隆幸 (2013). 名張市民意識調査アンケートの分析. 名張市宛報告書.
- ⑩ 宇田隆幸・藤井敦・石川徹也 (2004). 情報推薦方式. (特許 20046281).
- ⑪ [実務実績] (2002). シニア世代におけるWWWコミュニティ利用促進に関する研究報告.
- ⑫ [実務実績] (1999). ゴルフ場予約システム (現. 楽天GORA) 開発.
- ⑬ [実務実績] (1996). CDMA基地局研究・開発.
- ⑭ [実務実績] (1989). VAN NP 通信プロトコルコンバート開発.
- ⑮ [実務実績] (1984). ファームバンキング用通信プロトコル策定およびシステム設計・開発 (エミュレータ開発).
- ⑯ 宇田隆幸 (1983). 情報入力装置. (特許 昭58-237125).

所属学会
その他

情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、日本教育工学会
公益財団法人図書館振興財団 専門書・学術書選書委員会 選書員 (2015年4月～)
新潟市水道事業経営審議会委員 (2017年9月～ 2023年9月)
国土 (魚沼市土) 利用計画 魚沼市審議会委員 (2017年10月～ 2019年3月)
弥彦村学校運営協議会委員 (2019年4月～)
弥彦村教育委員会 第3期弥彦村教育振興基本計画策定委員 (2020年9月～ 2021年3月)



氏名
職 名
連 名
絡 方
学 法
歴 歴

ウメハラ エイチ

梅原 英一 UMEHARA Eiichi

教授 (2021年4月)

E-mail : umehara@nuis.ac.jp

東京工業大学工学部経営工学科

東京工業大学大学院総合理工学研究科システム科学専攻修士課程修了

電気通信大学大学院情報システム学研究科博士後期課程修了

学 位
職 歴

博士 (工学)、電気通信大学、2006年3月

川崎製鉄株式会社 (現JFE) (2年5ヶ月)

株式会社野村総合研究所 (29年)

東京都市大学メディア情報学部情報システム学科教授 (8年7ヶ月)

受 賞 歴

2006年 9月 日本社会情報学会論文奨励賞

2013年10月 経営情報学会論文賞

2020年 2月 日本印刷学会論文賞

2024年 2月 日本印刷学会論文賞

研 究 分 野
主 要 業 績

経営情報システム、社会情報システム

① Kentaro Ueda, Hirohiko Suwa, Masaki Yamada, Yuki Ogawa, Eiichi Umehara, Tatsuo Yamashita, Kota Tsubouchi, Keiichi Yasumoto, (2024) SSCDV: Social media document embedding with sentiment and topics for financial market forecasting, *Expert Systems With Applications*, vol.245.

② 梅原英一, 渡部和雄, 岩崎邦彦 (2024) 「読者調査に見る紙マンガと電子マンガの嗜好の違い」『日本印刷学会誌』 61 (1), pp.8-14.

③ 渡部和雄, 梅原英一, 岩崎邦彦 (2023) 「消費者の紙の出版物, 電子出版物への意識と行動の分析と利用促進策—テキストでの回答の分析を中心として—」『日本印刷学会誌』 60 (5), pp.305-313.

④ Umehara, E. (2022) A Game Theory Investigation of Contract Between IT Vendor and User in Problems of Information System, 『*Systems Research II*』, Springer (227-240).

⑤ 梅原英一 (2021) 「大学図書館のデジタル・トランスフォーメーションに対する組織のIT活用能力」『日本印刷学会誌』 58 (1), 18-22.

⑥ 林浩輝, 梅原英一, 小川祐樹 (2020) 「否決された大阪都構想のTwitter投稿における世論形成理論成立の考察」『社会情報学』 第8巻3号, pp.165-175.

⑦ 梅原英一, 加藤奈美恵, 諏訪博彦, 小川祐樹, 杉浦昌 (2020). 「組織における個人情報保護行動モデルの構築—従業員の個人情報保護行動を促進するためには—」『社会情報学』 第8巻3号, pp.81-95.

⑧ Sasaki, K., Suwa, H., Ogawa, Y., Umehara, E., Yamashita, T., Tsubouchi, K. (2020) Evaluation of VI Index Forecasting Model by Machine Learning for Yahoo! Stock BBS using Volatility Trading Simulation, *Proceedings of HICSS2020 (Hawaii International Conference on System Science)*.

⑨ K.Watabe, K.Iwasaki, E.Umehara (2015) Factors and Models for Promoting Consumer Use of Electronic Money, *International Journal of Japan Association for Management Systems*, pp7-14.

⑩ 諏訪博彦, 梅原英一, 太田敏澄 (2012) 「インターネット株式掲示板の投稿内容分析に基づくファクターモデル構築の可能性」『人工知能学会論文誌』 27巻6号, pp.376-383

⑪ E. Umehara, T. Ohta (2011) Game of Risk Communications-The Case of a Japanese Carmaker, *IEEE Transactions on Systems, Man, and Cyberneticspart A*, Vol.41, No.4, pp.651-661.

⑫ E. Umehara, T. Ohta (2009) Using Game Theory to Investigate Risk Information Disclosure by Government Agencies and Satisfying the Public - The Role of the Guardian Agent, *IEEE Transactions on Systems, Man, and Cyberneticspart A*, Vol.39, No.2, pp.321-330.

⑬ 丸山健, 梅原英一, 諏訪博彦, 太田敏澄 (2008) 「インターネット株式掲示板の投稿内容と株式指標の関係」『証券アナリストジャーナル11月・12月合併号』 pp.110-127.

⑭ 梅原英一, 太田敏澄 (2008) 「情報システムの統治組織の有効性比較」『経営情報学会誌』 第17巻2号, pp.39-59.

所 属 学 会
そ の 他

経営情報学会、社会情報学会、情報処理学会、人工知能学会、日本印刷学会
横浜市本人確認情報等保護審議委員会委員 (2013 ~ 2016)

東京都市大学名誉教授 (2021年4月より)



氏名	クワハラ サトル 桑原 悟 KUWAHARA Satoru
職名	教授 (2008年4月)
連絡方法	E-mail : kuwahara@nuis.ac.jp
学歴	1977年3月 東京都立工業高等専門学校機械工学科卒業 1981年3月 東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 1983年3月 東京農工大学大学院工学研究科修了 2008年3月 東京農工大学大学院博士後期課程単位取得満期退学
学位	工学修士 (東京農工大学、1983年3月)
職歴	1983年4月～ 2000年6月 三菱電機株式会社 情報システム技術センタ 専任 2000年7月～ 2001年3月 KPMGビジネスアシュアランス株式会社 シニアマネージャ
研究分野	情報セキュリティ。情報化社会の充実には、テクノロジーの発展とそれを実社会で利用するフレームワークの構築が重要である。特にインターネットのようなオープンネットワークにおいて、個人や組織の情報の完全性、可用性、機密性を確保するためのテクノロジーと利用のためのフレームワークについて研究を行っている。
主要業績	論文 ① 桑原悟 (2007). 「初心者プログラミング環境に関する一考察」『情報処理学会 情報科学技術フォーラム』, 2007 (6 (4) 411-414 (2007-08-22)) ② 桑原悟. (2005). 「e-Japan/u-Japan における一般利用者のための情報セキュリティ認知の社会環境に関する一考察」『情報処理学会情報システムと社会環境 (IS)』, 2005 (115 (2005-IS-094)), 7-13. ③ 桑原悟 (2005). 「ビジネスアプリケーションのための新しいアクセス管理の視点」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』8, 191-203. ④ 桑原悟 (2003). 「大学の役割とIT化に関する一考察」『情報処理学会研究報告情報システムと社会環境 (IS)』, 2003 (97 (2003-IS-085)), 9-14.
所属学会	情報処理学会 情報システム学会 日本リスク学会 ISACA
その他	・東京農工大学 非常勤講師 (2002 ～ 2021) ・情報処理技術者試験 (経済産業大臣所管) 試験委員 (1992 ～ 2012) ・Visiting Professor, University of Alberta (2007) ・CISA (Certified Information Systems Auditor) ・CISM (Certified Information Security Manager) ・電気通信主任技術者 (伝送交換, 線路), 工事担任者 (総合通信), 第一級陸上無線技術士, 第一級海上無線通信士, 航空無線通信士, 第一種情報処理技術者, 認定電気工事従事者, 第三種電気主任技術者



氏名
職 絡 方 法
学 歴

コバヤシ ミツオ

小林 満男 KOBAYASHI Mitsuo

教授 (2011年4月)

E-mail : mitsuo@nuis.ac.jp

1976年 3月 仙台電波工業高等専門学校電波通信学科卒業

1985年 3月 東京理科大学工学部II部電気工学科卒業

1998年 3月 産能大学大学院経営情報学研究科修士課程修了

2006年 3月 埼玉大学大学院経済科学研究科博士後期課程修了

博士 (経済学、埼玉大学、2006年3月)

1976年 4月 日本電信電話公社入社。自動車電話方式・デジタルマイクロ波方式・衛星通信システム等の開発・導入及び法人営業・SEに従事

2011年 3月 NTTコミュニケーションズ株式会社を退職

1989年10月 NTT社長表彰 (衛星中継網方式の実用化) 小林満男他9名

2008年 6月 最優秀論文賞 (第26回アメリカ航空宇宙学会 第26回国際通信衛星システム会議) 田中将義・坂本宏・小林満男・北山行治

学 歴

受 賞 歴

研 究 分 野

主 要 業 績

(1) 企業、公共分野における情報通信システムの利活用の研究

(2) 競争戦略形成プロセスの研究

著書

① 小林満男 (2019).「第11章 人的資源管理」高橋正泰 (監修). 竹内倫和・福原康司 (編)『ミクロ組織論』(pp. 195-213). 学文社.

② 小林満男訳 (2012).「第13章 ディスコースとパワー」高橋正泰・清宮徹 (監訳)『ハンドブック 組織ディスコース研究』(pp. 473-502). 同文館出版.

論文

① 小林満男. (2015)「PBLによる情報システム開発教育の実践」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』1, 18-26.

② Tanaka, M., Sakamoto, H., Kobayashi, M., & Kitayama, Y. (2014). Estimation of unwanted spurious domain emissions from a multicarrier transmitter. *IEEE Transactions on Aerospace and Electronic Systems*, 50(3), 2293-2303.

③ 小林満男. (2015)「新潟国際情報大学における情報システム教育改善の取り組み」『情報処理』55 (9), 1008-1011.

④ 小林満男・小宮山智志・上西園武良 (2014)「緩やかなインタラクションを重視した情報システム教育の実践」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』17, 111-121.

⑤ Tanaka, M., Sakamoto, H., Kobayashi, M., & Kitayama, Y. (2008). Unwanted Emissions of Multi-carrier Transmitter in Spurious Domain, 26th AIAA International Communications Satellite Systems, AIAA ICSSC2008, AIAA-2008-5464, 2008.

⑥ 田中将義・坂本宏・小林満男・北山行治 (2008).「マルチキャリア運用時の送信機からのスプリアス領域発射の検討」『信学技報』108 (58), 7-12.

⑦ 小林満男 (2005)「法人営業現場における持続的競争優位の構築」『埼玉大学経済科学論究』2, 43-60.

⑧ 小林満男 (2004)「業界の常識の観点からみた競争戦略」『竹野内情報工学研究所 IT懸賞論文』75-84.

⑨ 小林満男・根来龍之 (1998)「規制された業界の業界変革モデルの提案」『産能大学紀要』19 (1), 79-118.

⑩ 栗原功幸・小林満男・伊藤清敏 (1982)「4/5/6L-D1方式現場試験結果」『電気通信研究所研究実用化報告』31 (7), 1333-1348.

所 属 学 会

そ の 他

日本経営学会、組織学会、経営戦略学会、経営情報学会、情報システム学会
電子情報通信学会 (終身会員)、日本技術士会

技術士 (電気電子)

情報処理技術者 (特種)

無線従事者 (第1級総合無線通信士・第1級陸上無線技術士)

電気主任技術者 (第2種)、電気通信主任技術者 (伝送交換・線路)

長野大学企業情報学部 非常勤講師 (2008)

立教大学経営学部 兼任講師 (2010)

東京理科大学理窓技術士会 運営委員 (2008 ~ 2022) 監事 (2023)

新潟市水道事業経営審議会 委員 (副会長) (2011.10 ~ 2017.9)

一般財団法人自治体衛星通信機構 理事 (2012.4 ~)

経営情報学会理事 (2005 ~ 2006、2013 ~ 2016) 監事 (2023 ~)

経営情報学会 2014年秋季全国大会大会委員長

情報システム学会理事 (2017 ~) 第18回 (2022) 全国大会・研究発表大会委員長

新潟市西川図書館協議会 委員 (2013 ~ 2016) 会長 (2017 ~ 2018)

経営発達支援事業評価委員会委員、黒埼商工会 (2017 ~ 2021)、新潟西商工会 (2022 ~)

日本経営学会 第92回大会 (2018) 大会委員長

新潟市西区赤塚中学校 学校評議員 (2020 ~ 2021)、学校運営協議会委員 (2022 ~ 2023)

新潟砂丘遊々会事務局 (2018 ~)、新潟湿地都市研究所副理事長 (2024 ~)



氏名
職名
連絡方法
学歴

サトウ ケイイチ

佐藤 恵一 SATO Keiichi

教授 (2024年4月)

keiichi@nuis.ac.jp

一関工業高等専門学校電気工学科卒業

日本大学大学院生産工学研究科博士前期課程電気工学専攻修了

公立はこだて未来大学大学院システム情報科学研究科博士 (後期) 修了

博士 (システム情報科学) 公立はこだて未来大学 2021年3月

岩崎学園情報科学専門学校教員 (3年)

盛岡情報ビジネス専門学校教員 (3年)

愛知技術短期大学専任講師 (4年)

豊橋技術科学大学特任准教授 (1年)

函館工業高等専門学校講師～教授 (28年)

受賞歴
研究分野
主要業績

2005年 函館工業高等専門学校教員懸賞

人間情報学、スポーツ科学、教育工学

(著書)

伊藤, 東野, 佐藤 (1993) 「情報処理技術者試験問題集基礎編」 電波学園印刷局 1993年
(論文)

- ① 高井樹, 佐藤恵一 (2023). 「畳込みニューラルネットワークによる画像認識を用いた空手組手攻撃動作の識別」 情報処理北海道シンポジウム2023 57-58.
- ② 佐藤恵一 (2023). 「試験問題再利用可能、作業大幅に減少およびカンニングを防止するLMSを用いた試験実施方法」 KOSENフォーラム2023.
- ③ 佐藤恵一, 松原仁, 鈴木恵二 (2021). 「空手組手競技へのAI導入について: 攻撃動作識別実験からの考察」 運動とスポーツの科学 26 (2) 161-173.
- ④ Keiichi Sato, Hitoshi Matsubara, Keiji Suzuki (2020). Commonality of Motions Having Effective Features with Respect to Methods for Identifying the Moves Made during Kumite Sparring in Karate. In Proceedings of the 8th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support:icSPORTS 1 75-82.
- ⑤ 高内健成, 佐藤恵一 (2011). 「スコアブックのための空手動作の識別」 電気情報関係学会北海道支部連合大会講演論文集 195-195.
- ⑥ 佐藤 恵一, 栗山 繁 (2011). 「特徴学習を用いた空手組手の動作識別」 FIT (情報科学技術フォーラム) 2011論文集 情報処理学会、電子情報通信学会 RF005, PP75-8.
- ⑦ 佐藤恵一 (2004). 「eラーニングオーサリングシステム導入の利点と問題点」 高専情報処理教育研究発表会論文集 (24) 8-11
- ⑧ 佐藤恵一, 鳴海敏治, 太刀川寛 (2003). 「ネットワーク技術の学習」 PCカンファレンス北海道2003論文集 22-23.
- ⑨ 佐藤恵一 (2000). 「キャラクターを使った学習環境支援システムの開発」 日本教育工学会研究報告 49-54.
- ⑩ 佐藤恵一 (1998). 「インタラクティブビデオによる学習ソフトの開発」 日本教育工学第14回大会論文集 725-726.
- ⑪ 佐藤恵一 (1997). 「マルチメディアの基礎を習得するための実習」 日本高専学会誌 2 (1) 21-23.
- ⑫ 佐藤恵一 (1996). 「VisualBasicを用いたマルチメディアの実習」 日本教育工学第12回大会論文集 35-36.
- ⑬ 佐藤恵一 (1991). 「情報系専門学校におけるコンピュータネットワークの実習方法-LAN実習システムの作成とその実習方法」 教育工学関連学協会連合第3回全国大会 461-462.

所属学会
その他

日本運動・スポーツ科学学会

函館工業高等専門学校名誉教授 (2024年4月)

全国高等学校体育連盟空手道専門部委員 (2011年4月 - 2022年3月)

公立はこだて未来大学フォーラム「AIで変わる!スポーツの競い方、楽しみ方」講演 (2021年3月26日)

国立高等専門学校協会高等専門学校情報処理教育研究委員 (2001年4月 - 2009年3月)

JICA (国際協力機構) 技術教育支援プロジェクト:トルコ国派遣ネットワーク専門家 (2007年11月 - 2008年2月)

計算機学術利用北海道地区協議会理事 (2001年4月 - 2003年3月)

北海道新聞 道南みなみ風 インターネット解説寄稿 (2003年)

NHK視聴者委員会委員 (2000年4月 - 2001年3月)



氏名
職名
連絡方法
学歴

チカヤマ エイスケ

近山 英輔 CHIKAYAMA Eisuke

教授 (2017年4月)

E-mail : chikaya@nuis.ac.jp

1993年3月 長岡工業高等専門学校土木工学科卒業

1995年3月 長岡技術科学大学工学部生物機能工学課程卒業

1997年3月 長岡技術科学大学大学院工学研究科生物機能工学専攻修士課程修了

学位
学歴

博士 (工学、長岡技術科学大学、2010年6月)

2000年5月～ 2005年4月 (特) 理化学研究所ゲノム科学総合研究センターテクニカルスタッフ

2004年2月～ 2004年3月 東京農工大学工学部非常勤講師を兼任

2005年5月～ 2011年8月 (独) 理化学研究所植物科学研究センター技師

2010年7月～ 2011年8月 横浜市立大学大学院生命ナノシステム科学研究科大学院客員研究員を兼任

2011年1月～ 2011年8月 (独) 理化学研究所次世代計算機科学研究開発プログラムを兼任

2011年9月～ 2017年3月 新潟国際情報大学准教授

2019年9月～ 2020年8月 ヨハネス・ケプラー大学 (オーストリア) 客員教授

研究分野

(1) 生物物理学、生物情報科学

(2) 磁気共鳴

(3) 高性能計算

主要業績

① E. Chikayama, S. J. Ginthör, M. Bechmann, and N. Müller, "Estimation of Radiation Damping Rates Using ^{133}Cs , ^7Li and ^{31}P Solution NMR Spectroscopy and a Theoretical NMR RASER Model", *Magnetochemistry* 9, 221 (2023)

② T. Nakada, M. Miura, and E. Chikayama, "Development of real-time temperature measurement system for facial landmarks to estimate learner's emotions", 2022 13th International Congress on Advanced Applied Informatics Winter, 70-75 (2022)

③ Koki Hara, Shunji Yamada, Eisuke Chikayama, and Jun Kikuchi, "Parameter Visualization of Benchtop Nuclear Magnetic Resonance Spectra toward Food Process Monitoring", *Processes* 10, 1264 (2022)

④ Koki Hara, Shunji Yamada, Atsushi Kurotani, Eisuke Chikayama, and Jun Kikuchi, "Materials informatics approach using domain modelling for exploring structure-property relationships of polymers", *Scientific Reports* 12, 10558 (2022)

⑤ Shunji Yamada, Eisuke Chikayama, and Jun Kikuchi, "Signal Deconvolution and Generative Topographic Mapping Regression for Solid-State NMR of Multi-Component Materials", *International Journal of Molecular Sciences* 22, 1086 (2021)

⑥ S. Yamada, A. Kurotani, E. Chikayama, and J. Kikuchi, "Signal Deconvolution and Noise Factor Analysis Based on a Combination of Time-Frequency Analysis and Probabilistic Sparse Matrix Factorization", *International Journal of Molecular Sciences* 21, 2978 (2020)

⑦ Shunji Yamada, Kengo Ito, Atsushi Kurotani, Yutaka Yamada, Eisuke Chikayama, and Jun Kikuchi, "InterSpin: Integrated Supportive Webtools for Low- and High-Field NMR Analyses Toward Molecular Complexity", *ACS Omega* 4, 3361-3369 (2019)

⑧ Kengo Ito, Yuka Obuchi, Eisuke Chikayama, Yasuhiro Date, and Jun Kikuchi, "Exploratory machine-learned theoretical chemical shifts can closely predict metabolic mixture signals", *Chemical Science* 9, 8213-8220 (2018)

⑨ E. Chikayama and S. Chikayama, "Transcendental Numbers in Wonderland", *Math Horizons* 24, 22-23 (2017)

⑩ S. Tomita, S. Ikeda, S. Tsuda, N. Someya, K. Asano, J. Kikuchi, E. Chikayama, H. Ono, Y. Sekiyama, "A survey of metabolic changes in potato leaves by NMR-based metabolic profiling in relation to resistance to late blight disease under field conditions", *Magnetic Resonance in Chemistry* 55, 120-127 (2017)

所属学会

日本生物物理学会、日本核磁気共鳴学会、バイオスーパーコンピューティング研究会

その他

2011年9月～ 理化学研究所客員研究員



氏 名
職 名
連 絡 方 法
学 歴

学 位
職 歴

カワハラ カズヨシ

河原 和好 KAWAHARA Kazuyoshi

准教授（2019年4月）

E-mail : kawahara@nuis.ac.jp

1993年 信州大学工学部情報工学科卒業

1995年 信州大学大学院工学系研究科博士前期課程情報工学専攻修了

1998年 信州大学大学院工学系研究科博士後期課程システム開発工学専攻修了

博士（工学）（信州大学、1998年3月）

1998年4月～ 1999年3月 岐阜大学バーチャルシステム・ラボラトリー非常勤研究員

研 究 分 野
主 要 業 績

画像処理・画像認識・コンピュータビジョンとその応用に関する研究

論文

- ① 「深層生成モデルVAEおよびVQ-VAEの潜在空間を使った須恵器のクラスタリング」『日本情報考古学会講演論文集29巻』（印刷中）
- ② 河原和好・小林満男（2024）「ドローン撮影を用いたハクチョウ自動カウントの試み」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』
- ③ 河原和好・小林満男・石川洋（2023）「ドローンによる佐潟及び御手洗潟の環境調査」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』 6, 55-61.
- ④ Haruhiro Fujita, Masatoshi Itagaki, Kenta Ichikawa, Yew Kwang Hoo, Kazuyoshi Kawahara, Aliza Sarlan（2020）. Fine-tuned Surface Object Detection Applying Pre-trained Mask R-CNN Models, *IEEE Conference Proceedings of 2020 International Conference on Computational Intelligence (ICCI)*, 17-22.
- ⑤ 河原和好（2019）. 「IoT による地盤沈下の観測」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』. 2, 1-12.
- ⑥ 近藤進・河原和好・上村喜一・中野又右衛門・小林満男（2019）「無人航空機（ドローン）による水田と白鳥の観察」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』 2, 21-28.
- ⑦ 河原和好（2017）. 「小学生を対象にしたプログラミング教育について」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 3, 27-35.
- ⑧ 河原和好（2016）. 「福祉・介護・健康に関する画像処理の研究—視覚のシミュレーション—」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 2, 14-22.
- ⑨ 河原和好（2005）. 「ファジ理論を用いた画像の特徴抽出」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 8, 169-178
- ⑩ K.Kawahara, K.Nakashima, H.Fujita, T.Hara, T.Endo, T.Iwase（1999）. Edge Analysis of Digital Mammogram, *Proceedings of 2nd MAGNETO-ELECTRONICS International Symposium*, 339-342.
- ⑪ K.Kawahara, T.Miyazaki, Y.Shidama, H.Yamaura, H.Miyao（1997）. Fuzzy Image Processing with Topological Theory, *Proceedings of IEEE TENCON'97 (IEEE Region 10 Annual Conference)*, 1, 333-334.
- ⑫ 河原和好・師玉康成・宮崎敬・中村八束・山浦弘夫（1997）. 「ファジー集合論を用いた画像処理」『電子情報通信学会論文誌D』 80（1）, 166-174.

所 属 学 会
そ の 他

電子情報通信学会、情報処理学会

電子情報通信学会信越支部運営委員（2020～）

信越情報通信懇談会連絡担当（2020～）

WRO Japan 新潟地区実行委員（2019～）

特定非営利活動法人にいがたデジタルコンテンツ推進協議会幹事（2017～）

新潟国際情報大学研究者総覧 2025

2025年4月 発行

編 集：新潟国際情報大学 総務課

発 行：新潟国際情報大学

新潟市西区みずき野3丁目1番1号 〒950-2292

TEL.025-239-3111

FAX.025-239-3690



新潟国際情報大学

Niigata University of International and Information Studies

950-2292 新潟市西区みずき野3丁目1番1号

TEL.025-239-3111 FAX.025-239-3690

✉ somu@nuis.ac.jp 🌐 <https://www.nuis.ac.jp/>